

2010 年度 日本財団助成事業

ジュニア・ライフセービング教室の開催 および指導者養成プログラムの開発等

事業報告書

<目次>

- ◇ はじめに
- ◇ ジュニア教育の取り組みと今後の展望(継続)
- ◇ ジュニア・ライフセービング教室 <地域クラブ18箇所実施報告>
- ◇ ジュニア・ライフセービング教室における保護者の意識調査 <調査報告>
- ◇ ジュニア・ライフセービング指導指針およびジュニア・ライフセービング指導者養成システムのプログラム開発 <実施報告>
 - 1) ジュニア教育委員会(会議)での協議
 - 専門カリキュラム・例
 - 指導指針発行のプロセスと課題
 - JLA ミッションにおけるジュニア教育の理念
 - ジュニア指導者養成システムの構築
 - ジュニア・ライフセービング教育 指導者資格の意義
 - JLA ACADEMY
 - ジュニア・ライフセービング教育 指導者資格(案)
 - 2011 年度ジュニア指導者資格の展開に向けたロードマップ
 - 2) ジュニア教室・現地視察の実施
 - 3) ジュニア指導者研修会の実施
- ◇ おわりに(まとめ)

はじめに

本年度における活動の振り返りと、この報告書をまとめあげている時でありました。3月11日(金)東北地方太平洋沖地震、そして大津波による未曾有の災害が発生しました。時間の経過とともに甚大な被害の実態が明らかとなり、世界中を震撼させました。被災した地域を中心とした余震や、福島原発の放射性物質拡散などの危険に怯える日々が、今もなお続いています。

この地震や津波の被害により失われた尊い命に対しまして、心より哀悼の意を表します。なお、被災された地域の復興と、被災者の方々の安全と安心が一日も早く訪れますことを願っております。

水辺の安全、事故防止を追求する本組織と致しましても、今後長期的に最善の支援策を講じて参る所存であります。

日本財団助成事業において実施させていただいております、ジュニア・ライフセービングには「思いやりこそ最高のレスキュー」という教育理念を象徴する言葉があります。水辺の枠を超えて子どもたちの日常の中でも、困っている人や、苦しんでいる人がいたら手を差し伸べる優しさを…と導く言葉であります。ライフセービング指導者が冒頭に示した難局にどう向き合い続けるのか。今を生きる大人として、子どもとともに考え、学び、次世代に残していく使命を背負っているといっても過言ではありません。

日本財団助成事業によって継続的な支援を賜り、事業を大切に積み重ねさせていただく経験により、現在の立脚点があります。衷心より厚く御礼申し上げます。次年度も当協会がご支援に値する、もしくはそれを上回る情熱と社会使命を兼ね備えているかどうかの自己点検を怠らず、精進させていただく所存でございます。

特定非営利活動法人
日本ライフセービング協会

教育部担当理事 松本 貴行

ジュニア教育の取り組みと今後の展望(継続)

日本ライフセービング協会(以下、JLA)ジュニア教育委員会(旧教育委員会及び拡大委員会)の取り組みと今後の展望についてまとめることで、当面のゴールプランを確認できるようにする。

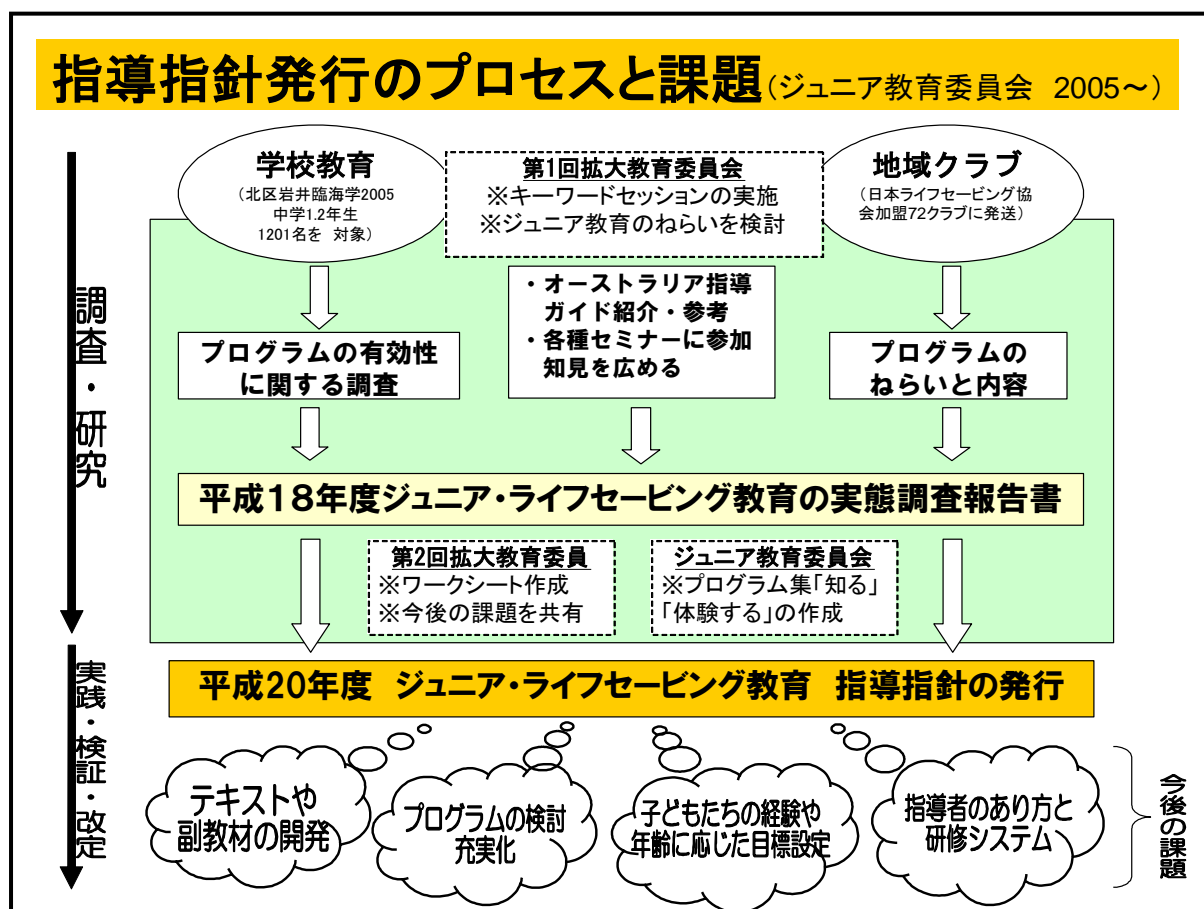


図 2-1 指導指針発行のプロセスと課題(「ジュニア・ライフセービング教育指導指針」より引用。)

<取り組みとして>

1) 2005 年度

- ①キーワードセッションの実施。
- ②ジュニア・ライフセービング教育(以下、ジュニア教育)の「ねらい」を作成。
- ③ジュニア教育に関連するプログラムやシステムについて検討課題の確認。
- ④北区岩井臨海学園におけるアンケート調査。(プログラムの有効性)

2) 2006 年度

- ①地域クラブにおけるアンケート調査。(プログラムのねらいと内容)
- ②ジュニア教育の実態調査報告書を発行。

3) 2007 年度

- ①各クラブジュニア教育関係者によるワークシート作成。(拡大教育委員会)
- ②ジュニア教育指導指針を発行。

4) 2008 年度

- ①ジュニア教育指導者養成システムのプログラム開発に着手。(課題整理)
- ②ジュニア教育指導者研修会の開催。(参加者による教材開発を含む)
- ③JLA 理事長とジュニア教育委員会の会談実施。(ジュニア教育の方向性確認)

<今後の展望として>

1) 2009 年度

- ①ジュニア教育指導者養成システムのプログラム開発研究。(指導者研修会開催)
- ②ジュニア教育に関する保護者の意識調査実施。
- ③ジュニア教育指導指針の周知と検証。

2) 2010 年度

- ①ジュニア教育指導者養成システムのプログラム構築。(指導者研修会開催)
- ②ジュニア教育テキスト(教科書)と副教材の開発研究。
- ③ジュニア教育指導指針の周知と検証。

3) 2011 年度

- ①ジュニア教育指導者養成システムのプログラム構築と検証。(プレ養成講習会実施)
- ②ジュニア教育指導指針の改定作業。
- ③ジュニア教育テキスト(教科書)の発行。

4) 2012 年度

- ①ジュニア教育指導者養成システムのプログラム策定。(養成講習会実施)
- ②ジュニア教育指導指針の改定版発行。
- ③ジュニア教育テキスト(教科書)の周知と検証。

(資料)

ジュニア教育委員会 2012 年度までの事業計画として

1. ジュニア教室

- 1) 教室の実施
 - 2) 器材の充実
- ジュニア教育の普及と全国展開
 - 新規実施クラブの開拓と教育環境の整備
 - 実施経験のない地域クラブに対してソフト(指導者やプログラム)・ハード(器材)面にて積極的にサポートを図る

2. 指導指針の普及と検証から改定へ

- 1) 実地検証・アンケート調査
 - 2) ジュニア用テキスト作成・副教材開発
 - 3) 保護者用ハンドブック作成
- 指導指針発行後の普及と検証に伴う、視察とアンケート調査の実施。改定に向けた研究
 - ジュニアが使用する、指導指針に対応したテキストの作成。地域クラブはもちろん、学校教育にも活用されやすいテキストを目指す。副教材の開発も視野に入れておく
 - 保護者向け教育ハンドブックの作成。子どもがジュニア教育を受ける環境には、保護者(家庭)の直接・間接的な影響がある。一番のサポーターとしてのあり方を具体的な表現で伝えることにより、共に子どもの成長を手助けすることが可能になる

3. 指導者養成システムの構築から策定へ

- 1) 研修会の開催
 - 2) 指導者養成プログラム研究開発
 - 3) ジュニア&ユース連絡協議会の開催
- 指導者養成システム・プログラムを意識した研修会の開催。情報伝達・共有、ジュニア担当者の交流
 - 養成プログラムのガイドライン策定。指導者養成事業スタート。新たな制度(資格)として、ジュニア教育サポーター(保護者・学校教員・学生など)を検討

- ジュニア&ユース連絡協議会の開催。小中高校教員のネットワーク構築と学校におけるライフセービング教育の可能性を探る

4. ジュニア競技会の発展と充実

- 1) 実行委員会の充実
 - 2) 運営マニュアルの作成
- 従来の競技運営委員会とジュニア教育委員会からなる実行委員会の充実。役割分担の明確化。競技会方向性の検討とともに拡大・充実を探る
 - ジュニア競技会に特化した運営マニュアルの作成

5. 協力事業としての岩井臨海学校

- 1) 今後の方向性について検討
 - 2) 指導員確保の方策
- 指導員確保のシステムが確立され、応募が増えることで多くの問題が解消できる

6. ファンデーションプログラムとしてのジュニア教育

- 1) 他団体とのコラボレーションの可能性を探る
 - 2) プログラム内容の精選と検討
- すべての活動の底辺(基盤)に位置づけられることを目指す

<ゴールプランとして>

1. ジュニア教育の3つの方向性 (ジュニア教育の実態調査報告書より)

- 地域クラブでの充実
- 学校教育への導入
- ファンデーションプログラムとしての確立。

2. 長期的な視点による「一貫指導教育システム」

- 日本の指導者全員が持つ考え方としての「一貫指導教育システム」。クラブや指導者が変わっても、“日本のスタンダード”として、ぶれない意識を指導者が共有するシステムづくりを目指す。ジュニア教育から継続した指導をすることにより、「セルフレスキュー」から「レスキュー」を可能にする心身を育み、「事故防止の精神」から「支え合う社会創造」を可能にする人間づくりが期待できる。
- ジュニア教育指導者は、“ライフセービング”で「人間教育」をする人。その人の人間性が子どもに大きな影響を与える。ジュニア期は目的ではなく手段として“ライフセービング”を活用したい。“オン・ザ・ビーチ”だけではなく“オフ・ザ・ビーチ”においても「人間教育」を意識したい。挨拶・礼儀・マナー・準備片付けなどあたりまえができるように。
- 水辺に限らない、“ライフセービングスピリット”を伝える道徳教育(広義の生命教育)の教材開発は、ジュニア教育年間プログラムのヒントになり得るのではないだろうか。
- スポーツのチカラを信用し、自然体験活動から得られる効用を最大限利用する。「救助力向上＝競技力向上」であるように、ジュニア期からのライフセービング競技(スポーツ)を正しく・積極的に伝えるシステムづくりの必要性。

ジュニア・ライフセービング教室 地域クラブ18箇所実施報告

- 1) 時 期:2010年6月～2011年2月
- 2) ねらい:水辺活動における楽しさの中から、自然や人との関わりあいを学び、相互理解から命の大切さを実感することによって、たくましく豊かな人間形成を目指す。
- 3) 対 象:小学生・中学生 / 目標人数:50名×15回 計750名
- 4) 場 所:過去の実績を踏まえ会員クラブへ公募し、開催クラブ15箇所を選定
- 5) 物 件:ジュニア用ボード/テキスト/パトロールキャップ/横断幕

【実施状況】

■ 応募状況や開催実績を踏まえ、18箇所で開催した。合計人数 751名

No.	日時	場所	クラブ	募集対象	参加人数
1	7/5	日間賀島 西浜海水浴場	愛知ライフセービングクラブ	小学校5年生	22
	7/5,6	日間賀島 西浜海水浴場		中学校3年生	12
	7/6,7	日間賀島 西浜海水浴場		小学校6年生	28
	8/17	りんくうビーチ(愛知県常滑市)		愛知県常滑市在住の小学生	20
2	7/11	大磯海水浴場(神奈川県)	大磯ライフセービングクラブ	幼稚園児～小学校6年生	29
3	7/11	乗浜海水浴場(静岡県)	西伊豆ライフセービングクラブ	小学校1年生～6年生	16
4	7/18	安下庄和佐湾海岸キャンプ場(山口県)	山口ライフセービングクラブ	小学校1年生～小学校6年生	19
5	7/18	大竹海岸(茨城県)	大竹サーフライフセービングクラブ	小学2年生～中学3年生	18
	7/19			小学2年生～中学3年生	15
	7/25			小学2年生～中学3年生	22
	8/1			小学2年生～中学3年生	18
	8/8			小学2年生～中学3年生	13
	8/14			小学2年生～中学3年生	13
6	7/25	小樽ドリームビーチ(北海道小樽市)	小樽ライフセービングクラブ	幼児～中学3年生	24
7	7/31,8/1	横浜海の公園海水浴場	横浜海の公園ライフセービングクラブ	小学校1年生～中学校3年生	79
8	8/1	鶴原海水浴場(千葉県)	勝浦ライフセービングクラブ	小学生以下	40
9	8/6	鶴沼海岸(神奈川県)	西浜サーフライフセービングクラブ	小学校4～6年生	11
10	8/7	銭函サンセットビーチ(北海道小樽市)	札幌ライフセービングクラブ	小学生・中学生	32
11	8/8	相良サンビーチ(静岡県)	相良サーフライフセービングクラブ	小学校1年生～小学校6年生	40
12	8/12,13	片男波海水浴場(和歌山県)	大阪ライフセービングクラブ	小学校1年生～小学校6年生	46
13	8/15	渋川海水浴場(岡山県)	岡山ライフセービングクラブ	小学校3～6年生	24
14	10/3	北谷公園サンセットビーチ(沖縄県)	北谷公園サンセットビーチライフセービングクラブ	小学校1年生～中学校3年生	27
15	10/3	江口浜海浜公園(鹿児島県)	かごしま磯ライフセービングクラブ	小学校3年生～中学校3年生	4
	10/31	柏崎アクアパーク(新潟市)	柏崎ライフセービングクラブ	小学校1年生～中学校3年生	19
2/13	柏崎アクアパーク(新潟市)	小学校1年生～中学校3年生		12	
17	8/10	大洗サンビーチ	大洗サーフライフセービングクラブ	児童養護施設の小学生	10
	8/10	大洗サンビーチ		大洗町祝町小学校全校生徒	99
18	8/7	前原海岸(千葉県鴨川市)	鴨川ライフセービングクラブ	小学校6年生以下	39

■ 第1回

日 時:平成22年7月5日(月) 9:30-11:30

場 所:日間賀島西浜海水浴場(愛知県知多郡)

主 催:愛知ライフセービングクラブ

参加数:日間賀小学5年生 22名

指導員:水川雅司、他11名

ねらい:学校授業の一環として実施。生まれ育った島の自然を肌で感じながら、楽しさや冒険性、また危険箇所・行為を認知し、命の大切さを学ぶ。

日 時:平成22年7月6日(火),7日(水) 9:30-11:30

場 所:日間賀島西浜海水浴場(愛知県知多郡)

主 催:愛知ライフセービングクラブ

参加数:日間賀小学6年生 28名

指導員:水川雅司、他11名

ねらい:学校授業の一環として実施。生まれ育った島の自然を肌で感じながら、楽しさや冒険性、また危険箇所・行為を認知し、命の大切さを学ぶ。

日 時:平成 22 年 7 月 5 日(月),6 日(火) 9:30-11:30

場 所:日間賀島西浜海水浴場(愛知県知多郡)

主 催:愛知ライフセービングクラブ

参加数:日間賀中学校 3 年生 12 名

指導員:水川雅司、他 11 名

ねらい:学校授業の一環として実施。生まれ育った島の自然を肌で感じながら、楽しさや冒険性、危険箇所・行為を認知し、命の大切さを学ぶ。また小学 6 年生の時に一度 LS プログラムを体験しているので、「入水せずに助ける」「助けを呼ぶ」という行為が実践できるレベルまで学ぶ。

日 時:平成 22 年 8 月 17 日(火) 10:30-14:30

場 所:りんくうビーチ(愛知県常滑市)

主 催:愛知ライフセービングクラブ

参加数:愛知県常滑市在住の小学生 20 名

指導員:水川雅司、他 11 名

ねらい:水辺活動における楽しさの中から、自然や人との関わりあいを学び、相互理解から命の大切さを実感することによって、たくましく豊かな人間形成を目指す。

■第 2 回

日 時:平成 22 年 7 月 11 日(日) 9:00-12:00

場 所:大磯海水浴場(神奈川県)

主 催:大磯ライフセービングクラブ

参加数:小学校 1 年生～小学校 6 年生 29 名

指導員:加藤文恵、他 12 名

ねらい:ジュニアプログラムを通し、海で遊ぶことの楽しさを学び、仲間を思いやること、命の大切さを実感させる。また、海の危険性や楽しく安全に遊べる知識や能力を身につかせ、将来は地元の子供たちの一人でも多くが大磯のライフセーバーとして活躍すること。

■第 3 回

日 時:平成 22 年 7 月 11 日(日) 11:30-12:20

場 所:乗浜海水浴場(静岡県)

主 催:西伊豆ライフセービングクラブ

参加数:西伊豆町内の小学校 1 年生～小学校 6 年生 16 名

指導員:山城悠嗣、他西伊豆ライフセービングクラブメンバー

ねらい:水辺活動における楽しさの中から、自然や人との関わりあいを学び、相互理解から命の大切さを実感することによって、たくましく豊かな人間形成を目指す。

■第 4 回

日 時:平成 22 年 7 月 18 日(日) 13:00-15:00

場 所:安下庄和佐湾海岸キャンプ場(山口県)

主 催:山口ライフセービングクラブ

参加数:小学校 1 年生～小学校 6 年生 19 名

指導員:小林義雄、他 5 名

ねらい:練習船を使った 3 日間のキャンププログラムの中で、海に親しみ海を知り、海を守る意識の醸成を通して、自然や人との係わり合いの中で本プログラムの実施により命の尊さを学ぶ。

■第 5 回

日 時:平成 22 年 7 月 18 日(日) , 19 日(祝月), 25 日(日)

8 月 1 日(日), 8 日(日), 14 日(土) 全日程 11:30-12:20

場 所:大竹海岸(茨城県)

主 催:大竹サーフライフセービングクラブ

参加数:小学校 1 年生～小学校 6 年生 99 名(全日程合計)

指導員:神萩明果 他 9 名

ねらい:水辺活動における楽しさの中から、自然や人との関わりあいを学び、相互理解から命の大切

さを実感することによって、たくましく豊かな人間形成を目指す。

■第6回

日時:平成22年7月25日(日) 10:00-12:30 13:30-16:00

場所:小樽ドリームビーチ(北海道)

主催:小樽ライフセービングクラブ

参加数:小学校1年生~中学校3年生 24名

指導員:大平拓司、他4名

ねらい:海というロケーションの中で、自分の心を開放し、楽しい仲間との関わり合いの中からお互いを尊重し、助け合う心を育てるとともに、命の大切さを学ぶ。

■第7回

日時:平成22年7月31日(土) 9:00-12:00 13:00-16:00

8月1日(日)10:00-15:00

場所:横浜海の公園(神奈川県)

主催:横浜海の公園ライフセービングクラブ

参加数:小学校1年生~中学校3年生 79名

指導員:岡田早織、他12名

ねらい:①自然や人とふれあい、おもいやりの心を学んでもらう。

②将来ライフセーバーになりたいと思うきっかけにする。

■第8回

日時:平成22年8月1日(日) 10:00-12:00

場所:鵜原海水浴場(千葉県)

主催:勝浦ライフセービングクラブ

参加数:小学校1年生~小学校6年生 40名

指導員:灰野遼、他5名

ねらい:自然(浜、海、岩場)の中で海の知識を学び、仲間の大切さやお互いを認め合うことから命の大切さを学ぶ。

■第9回

日時:平成22年8月6日(金) 9:00-12:00

場所:鵜沼海水浴場(神奈川県)

主催:西浜サーフライフセービングクラブ

参加数:小学校4年生~小学校6年生 20名

指導員:中本恵子、他5名

ねらい:水辺活動における楽しさの中から、自然や人との関わりあいを学び、相互理解から命の大切さを実感することによって、たくましく豊かな人間形成を目指す。

■第10回

日時:平成22年8月7日(土) 10:00-12:30

場所:銭函サンセットビーチ(北海道)

主催:札幌ライフセービングクラブ

参加数:小学校1年生~中学校3年生 32名

指導員:上野哲矢、他4名

ねらい:自然(砂浜・波打ち際・海中)の中で、人(参加者・保護者・指導員)と関わり合いながら心を開放し、お互いを認め合い、命の大切さを学ぶ。

■第11回

日時:平成22年8月8日(日) 9:00-12:00 13:00-16:00

場所:相良サンビーチ(静岡県)

主催:相良サーフライフセービングクラブ

参加数:小学校1年生~小学校6年生 40名

指導員:泉榮里子、他3名

ねらい:自然や人との関わりあいの中で、命の大切さ、自然の大切さを学ぶ。また地元の子どもたちに今一度海の大切さ、楽しさを知ってもらう。

■第12回

日時:平成22年8月12日(木)、13日(金) 11:00-13:00

場所:片男波海水浴場(和歌山県)

主催:大阪ライフセービングクラブ

参加数:小学校1年生~小学校6年生 46名

指導員:大畠依子、他5名

ねらい:水辺での活動の中で、楽しみながら自然のしくみを学び、人とのふれあいを通じて命の大切さや助け合うことの大切さを理解する。

■第13回

日時:平成22年8月15日(日) 13:00-16:30

場所:渋川海水浴場(岡山県)

主催:岡山ライフセービングクラブ

参加数:小学校1年生~小学校6年生 24名

指導員:高橋聡、他6名

ねらい:海と親しみながら、海辺の安全に関する知識と技術を体験学習することを通じて、子どもたちが安全で楽しく水辺で遊ぶ方法を身につけるとともに、生命の尊さや自然の大切さを知り、環境保全や社会奉仕活動の基礎を養う。

■第14回

日時:平成22年10月3日(日) 10:00-15:30

場所:北谷公園サンセットビーチ(沖縄県)

主催:北谷公園サンセットビーチライフセービングクラブ

参加数:小学校1年生~中学校3年生 27名

指導員:大城和樹、他5名

ねらい:海を楽しんでもらい、笑顔を生み出したい。

■第15回

日時:平成22年10月3日(日) 13:00-15:00

場所:江口浜海浜公園(鹿児島県)

主催:かごしま磯ライフセービングクラブ

参加数:小学校1年生~中学校3年生 4名

指導員:山下丞、他6名

ねらい:自然の海で遊ぶことの楽しさだけでなく、難しさも体験してもらいたい。

■第16回

日時:平成22年10月31日(日)、平成23年2月13日(日) 9:00-11:00

場所:柏崎アクアパーク(新潟県)

主催:柏崎ライフセービングクラブ

参加数:小学校1年生~中学校3年生 31名

指導員:浜田美保、他6名

ねらい:水辺活動における楽しさの中から、自然や人との関わりあいを学び、相互理解から命の大切さを実感することによって、たくましく豊かな人間形成を目指す。

■第17回

日時:平成22年8月10日(月) 9:00-12:00

場所:大洗サンビーチ(茨城県)

主催:大洗サーフライフセービングクラブ

参加数:児童養護施設小学校1年生~小学校6年生 10名

指導員:足立正俊、他大洗 SLSC クラブメンバー

ねらい:海という危険な素材を教育資源として、共に助け合いながら「生きる力」を得るヒントを与えたい。同時に理屈ではなく海を好きになってもらうことが大切な一歩であろう。

日時:平成 22 年 8 月 10 日(月) 13:00-16:00

場所:大洗サンビーチ(茨城県)

主催:大洗サーフライフセービングクラブ

参加数:大洗町祝町&夏海小学校 4 年生～小学校 6 年生 99 名

指導員:足立正俊、他大洗 SLSC クラブメンバー

ねらい:海という危険な素材を教育資源として、共に助け合いながら「生きる力」を得るヒントを与えたい。同時に理屈ではなく海を好きになってもらうことが大切な一歩であろう。

■第 18 回

日時:平成 22 年 8 月 7 日(土) 10:30-12:00

場所:前原海岸(千葉県)

主催:鴨川ライフセービングクラブ

参加数:小学校 1 年生～小学校 6 年生 39 名

指導員:太田奈々、他 7 名

ねらい:浜辺、海での体験を通して、自分一人でのあり方、親以外の多くの人との関わり大切さを学び、それを通して命の大切さを学ぶ

参加人数:合計 751人

【実施内容】

●プログラム内容(約3～4時間プログラム)

- ・スタッフ紹介、自己紹介
- ・準備体操
- ・水なれ、サーフフィットネス(インアウトやウェーディングの練習)
- ・サーフサバイバル(浮き身の練習、大きな声で叫ぶ練習、バックストロークの練習)
- ・ビーチクリーン
- ・1日のスケジュールの確認
- ・今日の目標
- ・ジュニアテキストを使用しての海の安全11か条
- ・バディーシステム(健康管理)
- ・危険生物の勉強
- ・水中でのシグナルのお勉強
- ・ライフセーバー使用器材の説明
- ・海象調査
- ・監視タワーに登ってライフセーバー体験
- ・レスキュー体験(水に入らずに道具を使ってのドライレスキュー方法を学ぶ)
- ・流れ体験(プールに流れを作り、水の力を体験する)
- ・ライフセーバーによるデモンストレーションを見る
- ・セルフレスキュー、ドライレスキュー(ロープやビニール袋を使用して自分を守る方法を知る)
- ・ライフセービング競技ビーチフラッグスを体験
- ・ニッパーボード
- ・レスキューチューブ体験(人を引っ張ることで命の重さを知る)
- ・心肺蘇生法、救急法の勉強(命の大切さを伝える)
- ・みんなでライフセービングリレー
- ・チームレスキュー(搬送やレスキュー方法を考え、挑戦させる)
- ・本日のまとめ、振り返り(行ったことを振り返り、仲間に自然に全てに感謝をする)

●一日のタイムテーブルの例(2時間)

10:00～10:10	<u>【開校式】ライフセービング・オリエンテーション</u>
10:10～10:30	海の安全11か条
10:30～10:40	ビーチクリーン
10:40～10:45	<u>休憩(水分補給)</u>
10:45～10:50	バディーシステム
10:50～11:00	準備運動・水なれ
11:00～11:10	レスキューデモンストレーション
11:10～11:20	サーフフィットネス
11:20～11:25	<u>休憩(水分補給)</u>
11:25～11:45	ニッパード、ビーチフラッグス体験
11:45～12:00	<u>【閉校式】振り返り、記念撮影</u>

【活動写真】





ジュニア・ライフセービング教室 保護者の意識調査アンケート<調査報告>

日本ライフセービング協会
ジュニア教育委員会

1. 調査概要

1) 調査の目的

ジュニア・ライフセービング教室（以下、ジュニア教室）等に「参加させる」と判断するのは保護者である。また、最大のサポーターになりうる可能性も大いに秘めている。そこで、保護者の視点からジュニア教室等への意見収集を実施し、今後のジュニア・ライフセービング教育やその指導のあり方を検証する。

今年度は、昨年度実施したアンケート集計結果からキーワードを抽出し、数値化できるような質問項目を設定した。また、日本財団より助成いただき完成することができた、平成 18 年度ジュニア・ライフセービング教育の実態調査報告書の内容（1.3.2 地域クラブにおけるジュニア教育の実態調査の考察 p.39）について検証できるようにした。

2) 調査の方法

①アンケート対象

2010 年度日本財団ジュニア教室 全国 18 クラブ

②アンケート回収クラブ及び回答者数

10 クラブ 回答者 133 名 （質問 3・4 については、9 クラブ 回答者 118 名）

③アンケート実施

ジュニア教室開催時、質問紙法にて実施。アンケート用紙は 5. 資料①を参照。

2. 調査結果および考察

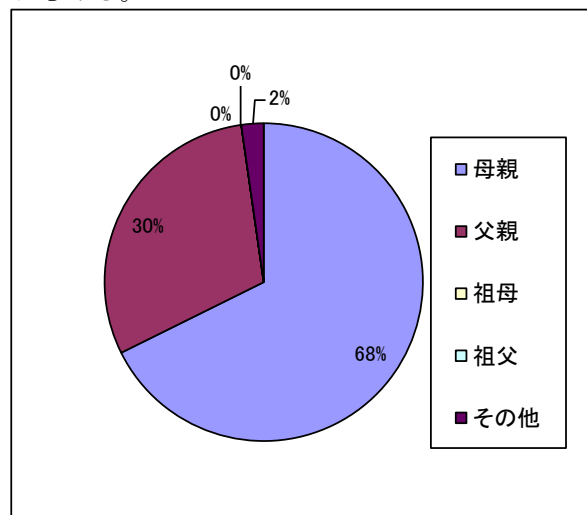
1) 保護者（回答者）について

①参加者との関係

母親の引率が 68%であり、母親に対するアプローチが重要であることが伺える。
地域クラブによっては、父親が多いところもある。

	母親	父親	祖母	祖父	その他
小樽	10	5			1
札幌	14	1			
大竹	10	2			
鴨川	8	4			
大磯	9	5			
相良	7	2			
大阪	9	4			
岡山	8	5			2
山口	4	8			
北谷	11	4			

	母親	父親	祖母	祖父	その他
合計	90	40	0	0	3

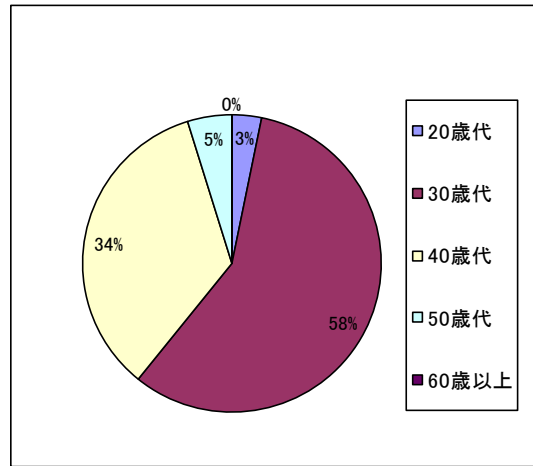


<その他>友人・兄・姉

②保護者の年齢

30歳代にて58%を占めることになり、40歳代を加えると92%になる。

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上
小樽		10	3		
札幌	1	11	2		
大竹		5	7		
鴨川		9	1		
大磯	1	8	3	2	
相良		6	3		
大阪		5	6		
岡山	2	3	7	3	
山口		8	3	1	
北谷		7	8		



	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上
合計	4	72	43	6	0

③休日の過ごし方

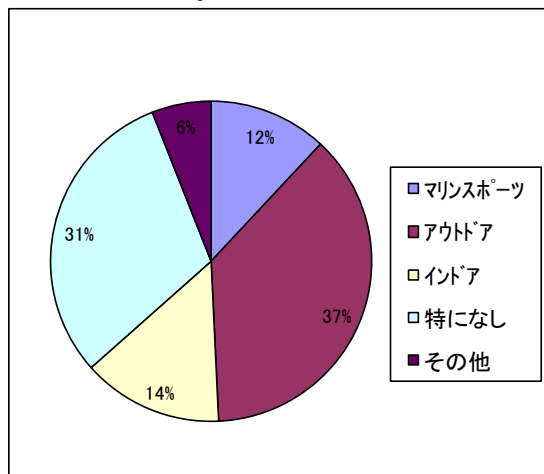
アウトドア志向が37%であり、マリンスポーツを加えると49%になる。

特になしが31%である。

保護者の休日の過ごし方とジュニア教室への参加はあまり影響がないように感じる。

地域クラブによっては、特になしが多いところもある。

	マリンスポーツ	アウトドア	インドア	特になし	その他
小樽	2	5	3	4	
札幌	1	5	4	3	
大竹		1		11	1
鴨川	3	6	1	1	
大磯	2	6	1	4	1
相良		3		5	1
大阪	2	6	4	1	
岡山	2	4	4	5	2
山口		7	1	3	1
北谷	4	7	1	4	2



	マリンスポーツ	アウトドア	インドア	特になし	その他
合計	16	50	19	41	8

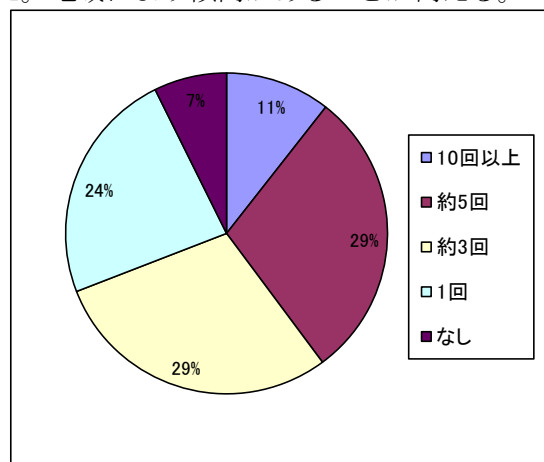
<その他>柔道・アウトドアとインドアの両方・スポーツ少年団・乗馬・ソフトボール・釣り

④海水浴の回数（1シーズン）

約1~5回海水浴をするが82%であり、回数による数値は平均的であった。

3つの地域クラブは、なし回答があった。地域により傾向があることが伺える。

	10回以上	約5回	約3回	1回	なし
小樽	2	6	5		
札幌	1	4	6	3	
大竹			4	3	3
鴨川	3	3	4		
大磯		6	4	1	3
相良			2	6	
大阪	1	2	3	6	
岡山		3	2	7	3
山口	1	6	5		
北谷	5	6	1	3	



	10回以上	約5回	約3回	1回	なし
合計	13	36	36	29	9

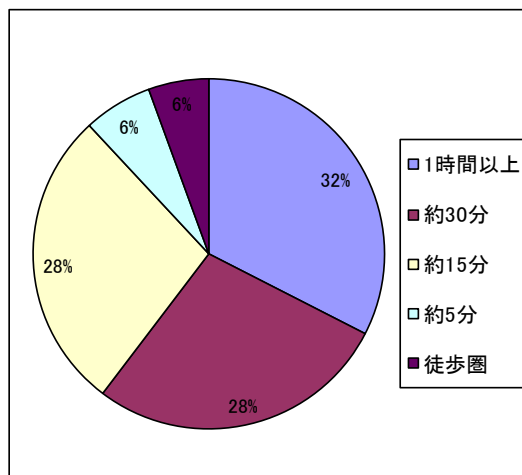
⑤海までの距離（自動車にて）

1時間以上が32%であり、30分以上を加えると60%になる。

5分以内が12%であることから、近所よりも遠方から参加している傾向がある。

地域クラブによっては、1時間以上が多いところもある。

	1時間以上	約30分	約15分	約5分	徒歩圏
小樽	4	7	2		
札幌		7	7		
大竹	4	4	3	2	
鴨川	6		1		3
大磯	2	1	7	1	3
相良	4	1	2	1	
大阪	11			1	
岡山	4	4	5	2	
山口	1	5	5		1
北谷	5	6	3	1	



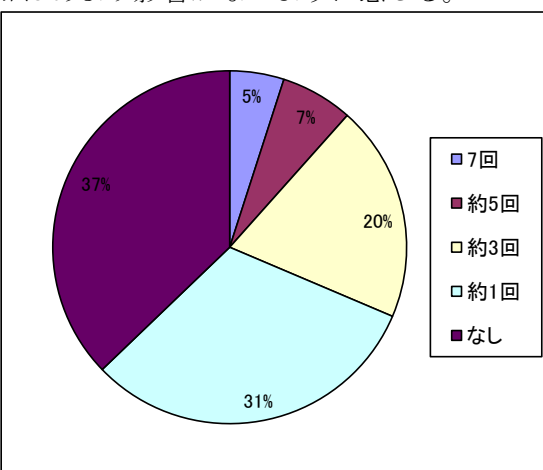
	1時間以上	約30分	約15分	約5分	徒歩圏
合計	41	35	35	8	7

⑥運動歴（1週間）

なしが37%である。約1回が31%であり、約3回を加えると51%になる。

保護者の運動歴とジュニア教室への参加はあまり影響がないように感じる。

	7回	約5回	約3回	約1回	なし
小樽		1	2	3	7
札幌			3	6	5
大竹	1		1	4	5
鴨川	1	1	2	3	3
大磯		1	7	3	3
相良			1	2	5
大阪	1		1	4	3
岡山	3	2	3	1	6
山口			1	6	5
北谷		3	3	6	3



	7回	約5回	約3回	約1回	なし
合計	6	8	24	38	45

⑦ライフセーバー歴

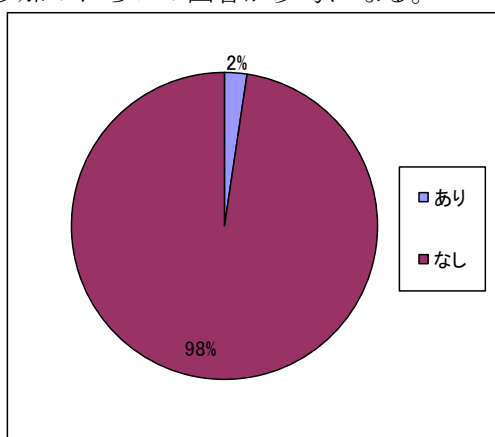
なしが98%であった。

ライフセービング活動未経験の保護者へのアプローチが重要であることが伺える。

ライフセービング歴がなくても、子どもにジュニア教室を体験させたい要素があるのであろう。

下記3) ③ジュニア教室参加のねらいの回答が参考になる。

	あり	なし
小樽		13
札幌	1	14
大竹		12
鴨川		10
大磯		14
相良		9
大阪		12
岡山		15
山口		12
北谷	2	13



	あり	なし
合計	3	124

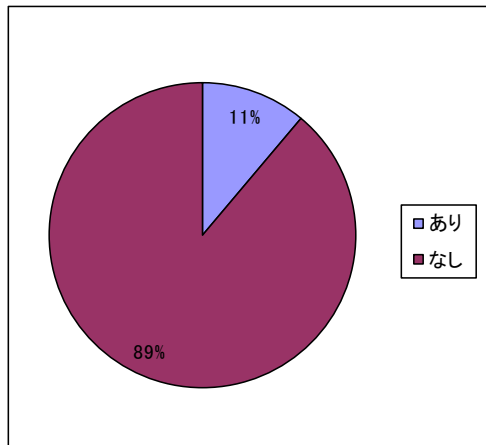
⑧応急手当資格取得

なしが 89%であった。

ライフセービング歴がなくても、資格取得している保護者がいることになる。

	あり	なし
小樽		13
札幌	1	13
大竹	1	11
鴨川	1	9
大磯	3	11
相良	2	
大阪	3	7
岡山		15
山口	1	11
北谷	1	14

	あり	なし
合計	13	104



2) 参加者について

①学年

小学校 3・4 年生が 31%であり、小学校 1・2 年生を加えると 60%になる。

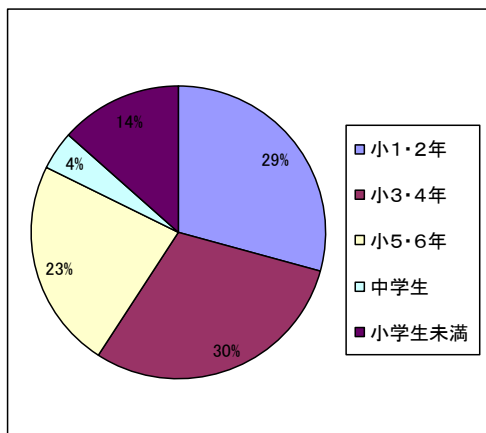
中学生は 4%であり、小学生未満は 13%である。

小学校低学年層が多く、中学生は極少数である。

地域クラブによっては、小学生未満が多いところもありニーズがあることが伺える。

	小1・2年	小3・4年	小5・6年	中学生	小学生未満
小樽	1	6	1	1	4
札幌	7	4	4	2	4
大竹		7	5	4	
鴨川	6				8
大磯	8	2	2		2
相良	5	3	2		1
大阪	7	3	8	0	2
岡山		7	9		
山口	8	7	3		1
北谷	6	10	4		

	小1・2年	小3・4年	小5・6年	中学生	小学生未満
合計	48	49	38	7	22

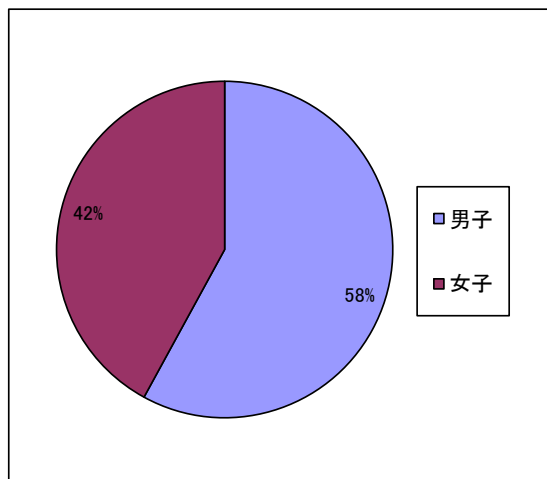


②性別

男子は 58%であり、女子は 42%である。

	男子	女子
小樽	6	7
札幌	13	13
大竹	9	7
鴨川	7	5
大磯	8	6
相良	8	3
大阪	12	3
岡山	8	8
山口	10	9
北谷	10	5

	男子	女子
合計	91	66



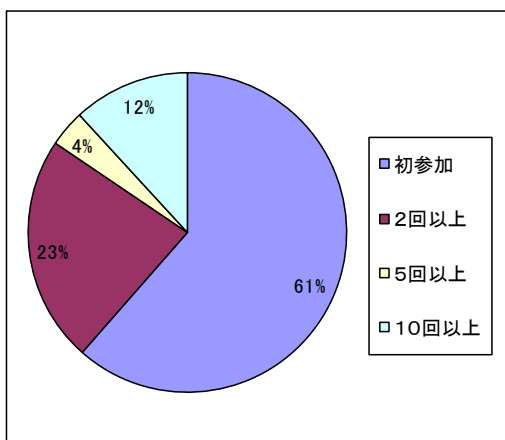
③ジュニア教室参加経験

初参加が 61%である。

2 回以上～4 回以下は 23%であり、10 回以上が 12%である。

新規参加者（子ども・保護者）獲得に向けた取り組みを継続することや、リピーターに対してのプログラム等の工夫が必要であると思われる。

	初参加	2回以上	5回以上	10回以上
小樽	7	4		
札幌	5	8		
大竹	6	1		9
鴨川	7	3		
大磯	5	7	1	1
相良	7	2		
大阪	12	2	0	0
岡山	11	3		
山口	19			
北谷	4	1	4	6



	初参加	2回以上	5回以上	10回以上
合計	83	31	5	16

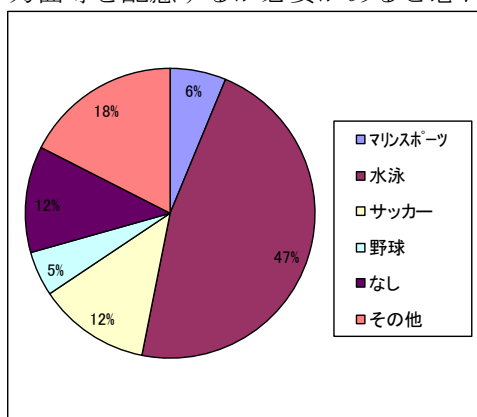
④運動・スポーツ経験

水泳が 46%であり、マリンスポーツを加えると 52%になる。

水に係わるスポーツ経験者が半数を超える状況から、今後も水に係わるスポーツ団体・個人にアプローチを深める必要があると思われる。

経験なしが 12%であり、指導の際に体力面等を配慮する必要があると思われる。

	マリンスポーツ	水泳	サッカー	野球	なし	その他
小樽		9	5		1	2
札幌	2	14	2			3
大竹		10	1		1	5
鴨川	2	7	1	1	1	1
大磯	1	6	1		3	2
相良		1	2		3	3
大阪	0	9	3	3	0	4
岡山	1	8	2	1	2	4
山口	1	2	1	2	5	2
北谷	3	9	2	1	3	2



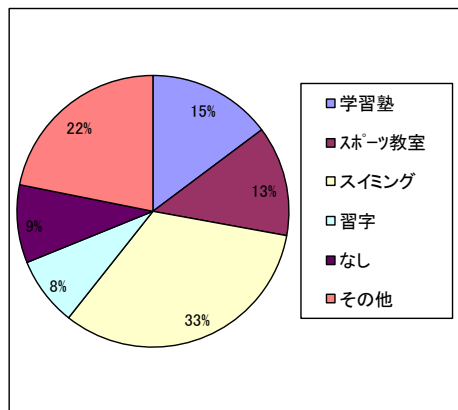
	マリンスポーツ	水泳	サッカー	野球	なし	その他
合計	10	75	20	8	19	28

<その他>バレエ・バドミントン・テニス・空手・柔道・体操・バスケ・陸上・少林寺・トライアスロン・ラグビー・乗馬・エアロビ・ハンドボール

⑤習い事

スイミングスクールが 33%であり、上記④同様に団体・個人にアプローチを深める必要があると思われる。

	学習塾	スポーツ教室	スイミング	習字	なし	その他
小樽	2		7		1	9
札幌	2	4	11			6
大竹	2	2	7	2	3	2
鴨川	1	1	5	1	2	4
大磯	4	3	3	1		1
相良	1	1	1	2	2	2
大阪	5	4	9	0	0	4
岡山	2	2	7	6	2	4
山口	2	3	4	2	5	3
北谷	6	4	6	1	2	5



	学習塾	スポーツ教室	スイミング	習字	なし	その他
合計	27	24	60	15	17	40

<その他>ジャズバレエ・スキー・茶道・算盤・ピアノ・サッカー・バレエ・空手・英会話・公文・ボーイスカウト・陸上・英語・ラグビー・絵画・乗馬・ヒップホップ・音楽

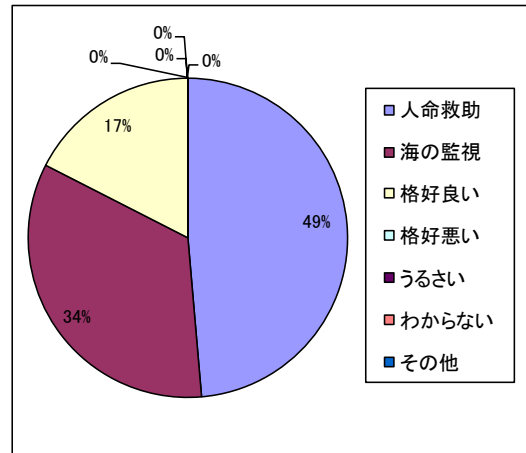
3) ジュニア・ライフセービング全般について

①ライフセーバーのイメージ

人命救助が49%であり、海の監視を加えると83%になる。

否定的な回答はゼロであり、正しく肯定的なイメージを持たれているようである。

	人命救助	海の監視	格好良い	格好悪い	うるさい	わからない	その他
小樽	13	7	4				
札幌	13	8	2				
大竹	10	8	4				
鴨川	10	10	6				
大磯	12	8	3				
相良	5	2	4				
大阪	9	6	2	0	0	0	0
岡山	12	7	6				
山口	5	6	1				



	人命救助	海の監視	格好良い	格好悪い	うるさい	わからない	その他
合計	89	62	32	0	0	0	0

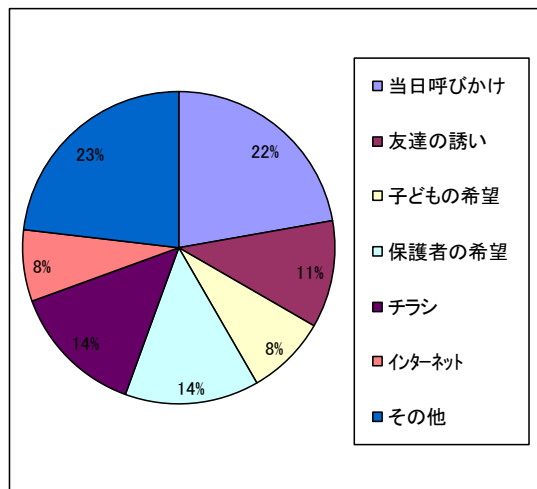
②ジュニア教室 参加のきっかけ

当日の呼びかけが22%であり、その他が24%である。

当日の呼びかけにより、参加者を獲得することも可能であることがわかる。

その他の回答から、地域クラブが市町村の広報誌から口コミまで様々な取り組みをされていることがわかる。今後も、告知を含めた参加者（子ども・保護者）獲得について工夫の継続が必要であると思われる。

	当日呼びかけ	友達の誘い	子どもの希望	保護者の希望	チラシ	インターネット	その他
小樽	3				2	4	6
札幌	1	2		2		1	4
大竹		1	4	7	1		1
鴨川	5	1	2		2		
大磯		2			1	1	7
相良	3	3		1			
大阪	6	1	1	2	0	2	0
岡山	3		1	1	9		3
山口	3	2	1	2			4



	当日呼びかけ	友達の誘い	子どもの希望	保護者の希望	チラシ	インターネット	その他
合計	24	12	9	15	15	8	25

<その他>市の広報誌・新聞・スイミングスクール・お楽しみ会・ボーイスカウト・親子キャンプ・学校の紹介・兄が参加して良かった

③ジュニア教室 参加のねらい (キーワードを5つ選出)

「海の知識を学ぶ」が62ポイントで一番多かった。

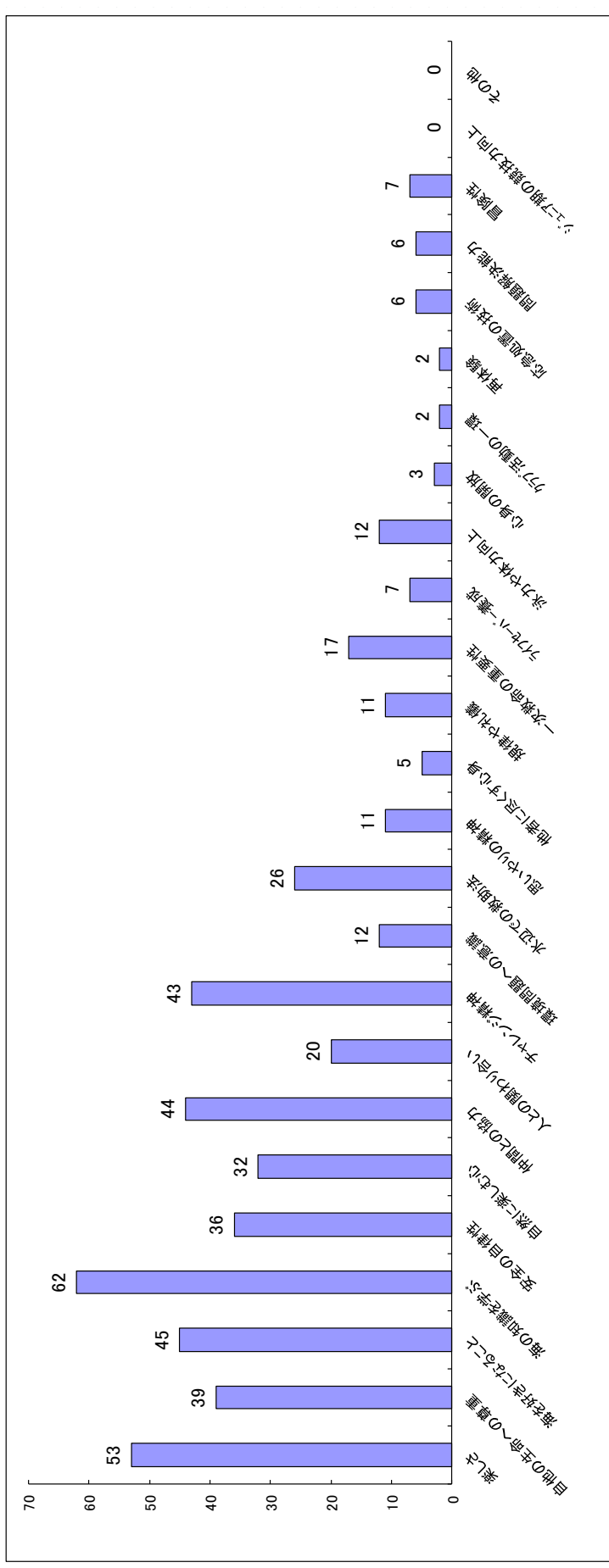
「楽しさ」が53ポイント、「海を好きになること」が45ポイント、「仲間の協力」が44ポイント、「チャレンジ精神」が43ポイントであった。

「ジュニア期の競技力向上」が0ポイントであった。

「再体験」「心身の開放」「ライフセーバー養成」等が5ポイント以下であった。

楽しさ	自他の生命への尊重	海を好きになること	海の知識を学ぶ	安全の自律性	自然に楽しむ心	仲間との協力	人との関わり合い	チャレンジ精神	環境問題への意識	水辺での救助法	思いやり	他者に尽くす心身	規律や礼儀	一次救命の重要性	ライフセーバー養成	泳力や体力向上	心身の開放	クラブ活動の一環	再体験	応急処置の技術	問題解決能力	冒険性	ジュニア期の競技力向上	その他
小樽	5	4	6	6	1	3	1	6	1	4	2		2	5			3	1					2	
札幌	7	3	8	4	5	7	3	3	2	3	1	1	1	3		1	2		2	1	2			
大竹	8	6	7	9	2	1	6	4	6	1	2	2	2			2	2			1				
鞆川	8	3	7	7	5	3	4	6	2	1						1							1	
大磯	7	1	7	5	2	6	5	3	2	3			1	1		3		1						
相良	4	3	5	1	2	2	3	2	1			2	1			2							1	
大坂	6	5	3	7	2	5	7	2	5	1	5	1	0	1	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0
岡山	2	4	3	12	7	1	3	4	1	5	4	1	2	5	1	2	2			3	2		2	
山口	6	6	6	7	6	8	7	1	6	1	5	1	2	2										

楽しさ	自他の生命への尊重	海を好きになること	海の知識を学ぶ	安全の自律性	自然に楽しむ心	仲間との協力	人との関わり合い	チャレンジ精神	環境問題への意識	水辺での救助法	思いやり	他者に尽くす心身	規律や礼儀	一次救命の重要性	ライフセーバー養成	泳力や体力向上	心身の開放	クラブ活動の一環	再体験	応急処置の技術	問題解決能力	冒険性	ジュニア期の競技力向上	その他
合計	53	39	45	62	36	32	44	20	43	26	11	5	11	17	7	12	3	2	2	6	6	7	0	0



考察する上で、平成 18 年度ジュニア・ライフセービング教育の実態調査報告書（日本財団助成）「地域クラブがジュニア教育の実施の際、教育のねらいとするキーワード調査結果」を示しておくことにする。高ポイントは、「楽しさ」「自他の生命への尊重」「海を好きになること」「海の知識を学ぶ」「安全の自律性」となっている。低ポイントは、「ジュニア期の競技力向上」「冒険性」「問題解決能力」「応急処置法の技術」「再体験の気持ち」となっている。

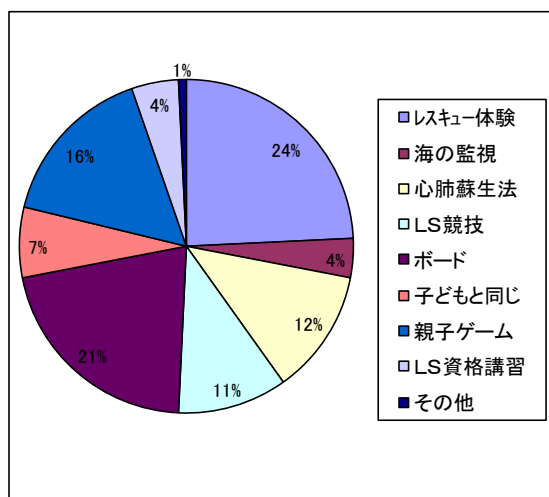
以上を比較すると、高ポイントでは、「海の知識を学ぶ」「楽しさ」「海を好きになること」が合致した。この結果は、ジュニア教室に参加させる保護者のニーズと教育の意図としてのねらいがマッチしていたことになる。逆に、保護者の参加のねらい「仲間の協力」「チャレンジ精神」と、教育者の教育のねらい「自他の生命への尊重」「安全の自律性」がミスマッチしている。僅かなポイントのズレではあるが、保護者の参加のねらいと教育のねらいにギャップが生じている状態であることが伺える。低ポイントでは、「ジュニア期の競技力向上」について、参加者・教育者が共にねらいとして重きを置いていない傾向にある。現在のジュニア教室の実情を考えれば妥当である。スポーツ教育の観点としては、正しいライフセービング競技の普及・教育とそのシステム構築が必要であると思われる。

④保護者プログラムがあったら、どんなことをやってみたいか？

レスキュー体験が 23%、ボードが 21%、親子ゲームが 16%であった。

子どもと同様なプログラムや一緒にできるゲームを望んでいるようである。

	レスキュー体験	海の監視	心肺蘇生法	LS競技	ボード	子どもと同じ	親子ゲーム	LS資格講習	その他
小樽	5		3		9		1	1	
札幌	4	1	3	3	1	2	2		
大竹		1	4	1	1		2		1
鴨川	2		2	6	4	2	3		
大磯	3	1	2	1	7		3	1	
相良	2	1			1		4		
大阪	6	0	1	1		2	1	1	0
岡山	4	1		1	2	3	4		3
山口	6		1	1	3		1		



	レスキュー体験	海の監視	心肺蘇生法	LS競技	ボード	子どもと同じ	親子ゲーム	LS資格講習	その他
合計	32	5	16	14	28	9	21	6	1

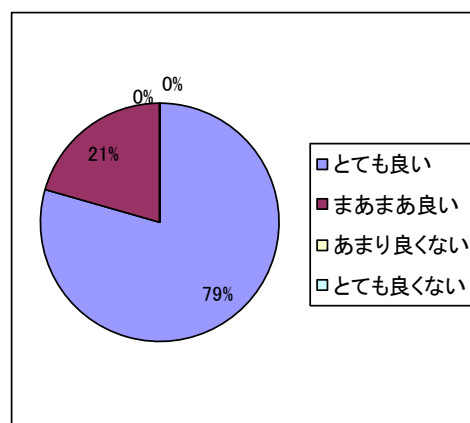
<その他>なし

4) ジュニア教室の評価

①内容

とても良いが 79%であり、肯定的な回答のみであった。

	とても良い	まあまあ良い	あまり良くない	とても良くない
小樽	11	2		
札幌	12			
大竹	8	4		
鴨川	8	2		
大磯	9	5		
相良	8	1		
大阪	9	2		
岡山	13	1		
山口	7	5		

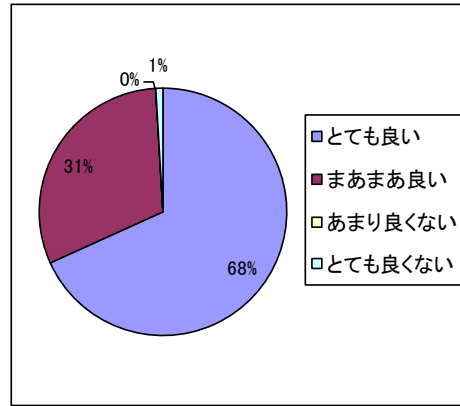


	とても良い	まあまあ良い	あまり良くない	とても良くない
合計	85	22	0	0

②時間

とても良いが68%であり、肯定的な回答がほとんどであった。

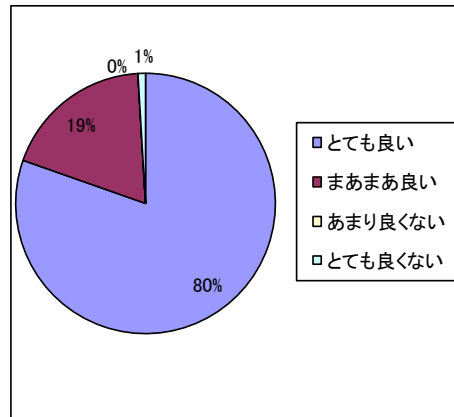
	とても良い	まあまあ良い	あまり良くない	とても良くない
小樽	8	5		
札幌	12			
大竹	8	4		
鴨川	5	4		1
大磯	10	4		
相良	9			
大阪	6	5		
岡山	9	5		
山口	6	6		
合計	73	33	0	1



③場所

とても良いが80%であり、肯定的な回答がほとんどであった。

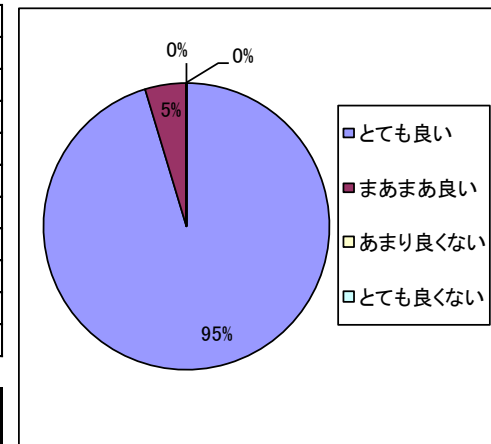
	とても良い	まあまあ良い	あまり良くない	とても良くない
小樽	11	2		
札幌	12			
大竹	10	2		
鴨川	9	1		
大磯	10	4		
相良	8			1
大阪	8	3		
岡山	12	2		
山口	6	6		
合計	86	20	0	1



④指導

とても良いが90%であり、肯定的な回答のみであった。

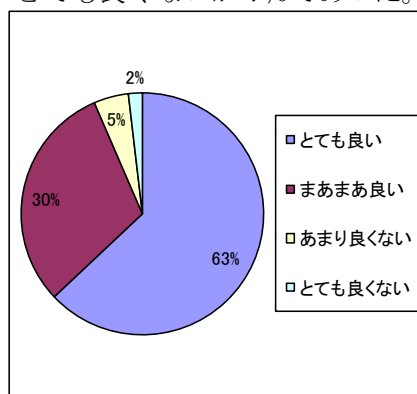
	とても良い	まあまあ良い	あまり良くない	とても良くない
小樽	13			
札幌	12			
大竹	11	1		
鴨川	9	1		
大磯	13	1		
相良	9			
大阪	10	1		
岡山	14			
山口	11	1		
合計	102	5	0	0



⑤告知

とても良いが62%であるが、あまり良くない・とても良くないが7%であった。

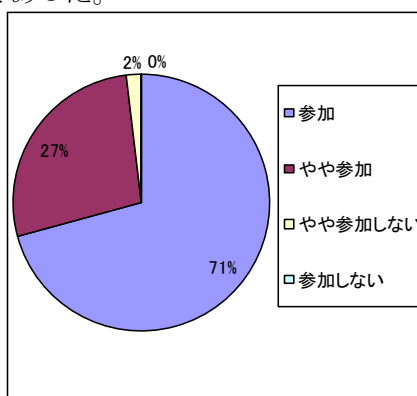
	とても良い	まあまあ良い	あまり良くない	とても良くない
小樽	8	5		
札幌	12			
大竹	4	8	1	
鴨川	6	4		
大磯	10	3	1	
相良	7			2
大阪	6	3	2	
岡山	7	6	1	
山口	8	4		
合計	68	33	5	2



⑥次回参加

参加が71%であるが、やや参加しないが2%であった。

	参加	やや参加	やや参加しない	参加しない
小樽	8	5		
札幌	11	1		
大竹	8	3		
鴨川	7	3		
大磯	10	3	1	
相良	8	1		
大阪	10		1	
岡山	6	8		
山口	7	5		
合計	75	29	2	0



4. 成果と課題

昨年度、初めて実施した日本財団ジュニア教室保護者アンケートの目的のひとつである、「数値化を目指す」を具現化することができ、アンケート集計結果の説得力が増したように感じる。比較検討することが容易になり、考察を含め、今後の調査研究の基盤になると確信する。

その中で、3)ジュニア・ライフセービング全般について③ジュニア教室参加のねらいの項目についての回答は、平成18年度ジュニア・ライフセービング教育の実態調査報告書の内容(1.3.2地域クラブにおけるジュニア教育の実態調査の考察 p.39)と比較できるように設定した。詳細は考察の通りである。

特に、実施形態として単発型ジュニア教室が多い状況を考えれば、参加させる保護者の意識が教育者のねらいとギャップが生じてしまうことは、ある程度仕方が無いことなのかもしれない。しかし、日本の特徴でもある単発型ジュニア教室を活かすべく、キーワード「自他の生命への尊重」「安全の自律性」にある『いのちの大切さ』を、子どもだけでなく保護者に対しても明示し展開していく必要があるのではないだろうか。ジュニア教室やジュニア・ライフセービング教育が、今後、様々な活動における安全の基礎となる「ファンデーションプログラム」として発展し存在性を見出していくことを考えればなおさらである。

課題として、日本ライフセービング協会ジュニア・ライフセービング教育のねらい「水辺活動における楽しさの中から、自然や人との関わりあい学び、相互理解からいのちの大切さを実感することによって、たくましく豊かな人間形成を目指す。」を、保護者や教育関係者等に浸透させていく『しかけ』づくりがあげられる。正しい理解や賛同を得ることができれば、益々ジュニア教室に子どもを参加させる機会・環境が増し、子ども達の水辺の安全教育に好影響を与え、溺水事故の減少にも貢献できるであろう。

今後も継続した調査を実施することで、ジュニア教室に子どもを参加させる保護者の意識やニーズを探り、更なるジュニア教室の実施・検証を通して、ジュニア・ライフセービング教育の普及・発展を押し進め、子ども達への安全の自律性や事故防止の思想、自他の生命尊厳の教育体系化を目指したい。

5. 資料

資料① アンケート用紙

保護者アンケート (2010年度)

日本ライフセービング協会
ジュニア教育委員会

このたびは、ジュニア・ライフセービング教室に参加していただきありがとうございます。

今後のジュニア・ライフセービング教育発展のためアンケートにご協力ください。よろしくお願ひいたします。(保護者の方がご記入ください。該当する番号1つ〇印をしてください。その他はカッコ内にご記入ください。)

1. 保護者(回答者)についての質問です。

- 1) 参加者との関係 1. 母親 2. 父親 3. 祖母 4. 祖父 5. その他 ()
- 2) 保護者の年齢 1. 20歳代 2. 30歳代 3. 40歳代 4. 50歳代 5. 60歳以上
- 3) 休日の過ごし方 1. マリンスポーツ 2. アウトドア 3. インドア 4. 特になし
5. その他 ()
- 4) 海水浴の回数(1シーズン) 1. 10回以上 2. 約5回 3. 約3回 4. 1回 5. なし
- 5) 海までの距離(自動車にて) 1. 1時間以上 2. 約30分 3. 約15分 4. 約5分 5. 徒歩圏
- 6) 運動歴(1週間) 1. 7回 2. 約5回 3. 約3回 4. 約1回 5. なし
- 7) ライフセーバー歴 1. あり 2. なし
- 8) 応急手当資格取得 1. あり 2. なし

2. 参加者についての質問です。

- 1) 学年 1. 小学1・2年 2. 小学3・4年 3. 小学5・6年 4. 中学生 5. 小学生以下
- 2) 性別 1. 男子 2. 女子
- 3) ジュニア教室参加経験 1. 初参加 2. 2回以上 3. 5回以上 4. 10回以上
- 4) 運動・スポーツ経験 1. マリンスポーツ 2. 水泳 3. サッカー 4. 野球 5. なし
6. その他 ()
- 5) 習い事 1. 学習塾 2. スポーツ教室 3. スイミング 4. 習字 5. なし
6. その他 ()

3. ジュニア・ライフセービング全般についての質問です。

- 1) ライフセーバーのイメージ
1. 人命救助 2. 海の監視 3. 格好良い 4. 格好悪い 5. うるさい 6. わからない
7. その他 ()
- 2) ジュニア・ライフセービング教室 参加のきっかけ
1. 当日の呼びかけ 2. 友達の誘い 3. 子どもの希望 4. 保護者の希望 5. チラシ
6. インターネット 7. その他 ()
- 3) ジュニア・ライフセービング教室 参加のねらい (5つ〇印を記入)
1. 楽しさ 2. 自他の生命への尊重 3. 海を好きになること 4. 海の知識を学ぶ
5. 安全の自律性 6. 自然に楽しむ心 7. 仲間との協力 8. 人との関わり合い
9. チャレンジ精神 10. 環境問題への意識 11. 水辺での救助法 12. 思いやりの精神
13. 他者に尽くす心身 14. 規律や礼儀 15. 一次救命の重要性 16. ライフセーバー養成
17. 泳力や体力向上 18. 心身の開放 19. クラブ活動の一環 20. 再体験 21. 応急処置
22. 問題解決能力 23. 冒険性 24. ジュニア期の競技力向上 25. その他 ()
- 4) 保護者プログラムがあるとしたら、どんなことをやってみたいですか?
1. レスキュー体験 2. 海の監視 3. 心肺蘇生法 4. ライフセービング競技 5. ボード
6. 子どもと同じプログラム 7. 親子ゲーム 8. ライフセーバー資格講習 9. その他 ()

4. 本日のジュニア・ライフセービング教室についての質問です。

- 1) 内容 1. とても良い 2. まあまあ良い 3. あまり良くない 4. とても良くない
- 2) 時間 1. とても良い 2. まあまあ良い 3. あまり良くない 4. とても良くない
- 3) 場所 1. とても良い 2. まあまあ良い 3. あまり良くない 4. とても良くない
- 4) 指導 1. とても良い 2. まあまあ良い 3. あまり良くない 4. とても良くない
- 5) 告知 1. とても良い 2. まあまあ良い 3. あまり良くない 4. とても良くない
- 6) 次回参加 1. 参加 2. やや参加 3. やや参加しない 4. 参加しない

ありがとうございました。

ジュニア・ライフセービング指導指針および
ジュニア・ライフセービング指導者養成システムの
プログラム開発 <実施報告>

1) ジュニア教育委員会(会議)での協議

- 年間を通じて委員会を開催し、各ジュニア諸事業における指導指針の普及と検証ならびにジュニア指導者養成について協議した。
- 実施日
 - 04月11日(日)
 - 05月08日(土)
 - 06月08日(火)
 - 07月13日(火)
 - 08月21日(土)
 - 09月14日(火)
 - 10月16日(土)
 - 11月28日(日)
 - 12月18日(土)
 - 01月22日(土)
 - 02月19日(土)
 - 03月26日(土)
- 協議プロセス
 - 平成17年度の調査研究を経て、「平成18年度ジュニア・ライフセービング教育の実態調査報告書」発行
 - 平成17年度より日本財団助成「指導者養成システムの調査研究」の継続実施
 - 「平成19年度 ジュニア・ライフセービング教育 指導指針」発行
 - 平成20年度は指導指針を中心とした指導者研修会を実施。指導者養成に向けた具体的なカリキュラムの検討。小峯理事長を交えてジュニア委員会を実施、指導者の在り方についての方向性を議論
 - 平成21年度はジュニア教室、参加保護者のアンケートなどにより、客観的に指導の在り方やニーズを検証。指導者養成を視野に入れたカリキュラムにて、関東、関西の2会場において指導者研修会を実施
 - 平成22年度は、平成23年度以降に立ち上げ予定のJLAアカデミー(現JLA資格認定講習会)のジュニアライフセービング・インストラクターを始めとした指導者資格の体系、プログラム内容、受講条件等の精査を実施し、ジュニア指導者資格の運用に向けての議論を重ねる
- 指導者資格の存在意義と課題
 - (仮称) ジュニア・ライフセービング インストラクター
 - 資格コンセプト
 - ◇ 『JLA活動における「教育」の在り方を理解し、あらゆる環境下(水辺に限定されない)において子どもの発育発達に応じた体験活動を実施し、ライフセービングの精神を正しく伝えていける情熱と資質を高めていく』
 - そうすることで・・・
 - ◇ 子どもを指導する責任感を高め、社会的認知を積み上げる(保護者への対応)
 - ◇ 地域クラブにおける継続可能なジュニア活動の展開が可能(指導者の質を確保)
 - ◇ 学校教育、他団体交流への展開を視野に入れた活動実践
 - ◇ 指導指針に基づく基本姿勢と、地域を生かしたオリジナリティーとの共存共栄
 - ◇ 指導者ネットワークの構築と研修の場の創造(研究発表・指導者交流)
 - 年度内の課題
 - ◇ 国際ライフセービング連盟(ILS)資格との連動をあらかじめ視野に入れるかの検証
 - ◇ 受講条件の検討・他資格との連動性
 - ◇ 教科書や副教材の開発
 - ◇ ジュニアの現場における資格所持者と未取得者の在り方
 - ◇ 平成22年度実施の指導者研修会の検証
 - ◇ 指導指針の改定(指導者の教本にリンク)

- ◇ 子どもたちが取得するジュニア資格の検討
- ◇ ジュニア指導者資格の受講条件
- ◇ 講習会内容

● ジュニア教育指導者養成のガイドライン策定(案)

▶ 専門カリキュラム(案)

- ◇ ジュニア・ライフセービング概論
- ◇ 乳児・幼児CPR
- ◇ 教育(学習指導要領)について
- ◇ ワークショップ (3つのテーマに沿ってのレクリエーション、ジュニア教室のマネジメント)
- ◇ 障害児の対応について (「福祉」を視野に含めたテーマ)
- ◇ 現代の子ども事情～日本の子どもたち～
- ◇ ことばと指導法
- ◇ 子どもとライフセービングスポーツ

<専門カリキュラム・例>

■ジュニア・ライフセービング概論(案)

タイトル	項目	時間		目標と内容
		学科	実技	
	導入			今夏の夏のジュニア教室や競技会の実績に触れ、協会を代表し感謝申し上げます。
日本の子どもたちとライフセービング	事故防止の精神を社会へ	10	0	JLAミッションにおけるジュニア教育の理念を伝え、ジュニア目標についても再認識いただく。
	ジュニア・ライフセービング教育の現状		0	体験活動としての社会的認知から、次なるステージへ(地域性を高め、再体験の気持ちを満たせる活動形態へ)
	指導指針発行の経緯と今後の課題整理		0	指導指針発行の経緯を理解し、今後の課題を共有する
ジュニア・ライフセービング教育の可能性	継続的活動の効果	10	0	地域性を生かした活動から得られる可能性。ライフセーバーの再活動の場となり得る。相乗効果を期待。ライフセービングという題材そのものが指導者にとっての「危機管理」となり、学ぶ子どもたちにとっての「危機回避」につながる。
	地域ジュニアを核とした広がり		0	「いつでも、どこでも、だれにでも」を基本においた活動姿勢。他団体との共存共栄。
	学校におけるジュニア教育		0	実践例をもとに、その実施形態を認識いただく。また協会としてもそのニーズに対応する指導者の質を確保していきたい。指導者養成について触れる。
	まとめ			ジュニア教育は「事故を未然に防ぐ」という協会理念と合致する。「事故を起こさない人」を多く輩出していく。全国各地の各クラブにジュニアの категория が定着していくことを展望としたい。
合計		20	0	
		20		

■乳児・幼児CPR(案)

タイトル	項目	時間		目標と内容	留意点	教材・器材
		学科	実技			
ジュニア教室現状	CPRコンテストの現状	8		全日本、学生選手権でのCPRコンテスト結果をもとにライフセーバーのCPR手技の現状を知る。		・パソコン ・プロジェクター
	CPR年齢区分			CPR年齢区分を理解する。		
	第一三共ジュニア教室参加者区分			ジュニア教室に参加している子どもの区分を知る。		
	指導者の任務について			水泳指導者を例に、指導者の任務は「安全管理」が最優先されることを理解する。		・水泳指導教本 P37
小児・乳児CPR	一次救命処置の年齢別比較	10	0	一次救命処置の年齢別比較表をもとに技術の確認を行う。同時に小児のデモンストレーションを行う。		・資料配布 心肺蘇生法教本 P24 ・レサンジュニア ・AED(小児用パッド含む)
	まとめ	1		小学生が父親を救命した事例をあげ、ジュニア教室で子どもたちに救急法の技術伝達の必要性を確認する。		
合計		19	0			
		19				

■教育(学習指導要領)について(案)

【教育法規】

タイトル	項目	時間		目標と内容	留意点	教材・器材
		学科	実技			
教育法規	日本国憲法	2	0	日本国憲法における我が国の教育にかかる条文について理解する。		教育小六法等
	教育基本法	8	0	第一章 教育の目的及び理念 教育の目的／教育の目標／生涯学習の理念／教育の機会均等 第二章 教育の実施に関する基本 義務教育／学校教育／大学／私立学校／教員／家庭教育／幼児期の教育／社会教育／学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力／政治教育／宗教教育 第三章 教育行政 教育行政／教育振興基本計画 第四章 法令の制定 以上について、理解する。		小学校学習指導要領
	学校教育法	3	0	第二章 義務教育 第四章 小学校 第八章 特別支援教育 以上について、理解する。		小学校学習指導要領
	学校教育法施行規則	2	0	第四章 小学校 第二節 教育課程 第八章 特別支援教育 附則 以上について、理解する。		小学校学習指導要領
合計		15	0			
		15				

【教育・指導要領】

タイトル	項目	時間		目標と内容	留意点	教材・器材
		学科	実技			
幼稚園 教育要領		0	0	第1章 総則 第1 幼稚園教育の基本 第2 教育課程の編成 第3 教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動など 以上について、理解する。		幼稚園教育要領
小学校 学習指導要領		5		第1章 総則 第1 教育課程編成の一般方針 第2 内容等の取扱いに関する共通的事項 第3 授業時数等の取扱い 第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項 以上について、理解する。		小学校学習指導要領
中学校 学習指導要領		0	0	第1章 総則 第1 教育課程編成の一般方針 第2 内容等の取扱いに関する共通的事項 第3 授業時数等の取扱い 第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項 以上について、理解する。		中学校学習指導要領
合計		5	0			
		5				

【指導法】

タイトル	項目	時間		目標と内容	留意点	教材・器材
		学科	実技			
指導計画作成	指導案の作成	5		ジュニア・ライフセービング教育指導指針に基づいた指導案を作成する。		
指導実践	指導案に基づいた指導実践	5	30	指導案に基づいた指導を実践する。		ジュニア・ライフセービング教育指導指針
指導評価	指導と評価	5		指導案に基づいた指導実践を評価する。		
指導総括	指導の総括	5		計画・実践・評価をもとに次につなげるための総括を行う。		
指導方法	実態把握と導入	5		対象者の実態把握とそれに基づいた導入について理解し、実習する。		
	全習法と分習法	5		2通りの学習伝達方法を理解し、実習する。		
	チーム・ティーチング	5	30	チーム・ティーチングについて理解し、実習する。		
	配慮を要する対象者	5		配慮を要する対象者について理解する。		
合計		40	60			
		100				

【マネジメント】

タイトル	項目	時間		目標と内容	留意点	教材・器材
		学科	実技			
マネジメント	イシュー・マネジメント リスク・マネジメント クライシス・マネジメント	20	0	イシュー・マネジメント、リスク・マネジメント、クライシス・マネジメントについて理解し、ジュニア・ライフセービング教育に係るマネジメントについて考える。		【参考文献】 「説明責任」とは何か (PHP新書) 井之上喬
	同意書	10	0	参加者(児童、生徒)の保護者に対する「同意書」作成について理解する。		
	プログラム実施判断基準	20	0	天候不順等の環境要因による実施判断について理解する。		【参考資料】 岩井臨海学園指導員マニュアル ジュニア・ライフセービング 競技会実施規準
合計		50	0			
		50				

■障害児の対応について(案)

【特別支援教育】

タイトル	項目	時間		目標と内容	留意点	教材・器材
		学科	実技			
特別支援教育	いのちについて	3		「生かし合う・高め合う教育」について		
	特別支援教育	6		特別支援教育の基本的な考え方を知る		
実態把握	全人教育	2		全人教育による視点知る		
	実態把握のポイント	3		実態把握する上でのポイントを知る		
支援の仕方	声かけの基本	3		支援が必要な人に対する声かけの配慮事項を知る		
	プログラムに入る前に	3		プログラムに入る前の注意点を知る		
合計		20				
		20				

■現代の子ども事情(案)

【子どもと社会】

タイトル	項目	時間		目標と内容	留意点	教材・器材
		学科	実技			
子どもと社会	子どもの現状	5	0	子どもの死生観を通して現状を学び、子どもを理解する。		
	子どもと環境の変化	15	0	子どもを取り巻く社会環境の変化を学び、子どもを理解する。		
	日本と世界の子ども	15	0	日本や世界の子ども達について学び、子どもを理解する。		
	子どもと親(保護者)	15	0	子ども親(保護者)の関係や現状を学び、子どもを理解する。		
合計		50	0			
		50				

【子どもの特徴】

タイトル	項目	時間		目標と内容	留意点	教材・器材
		学科	実技			
子どもの特徴	子どもの成長	5	0	子どもの健全な成長について学び、子どもを理解する。		
	子どもの心	15	0	思春期について子どもの現状を学び、子どもを理解する。		
	子どもの身体	15	0	発育発達について子どもの現状を学び、子どもを理解する。		
	コミュニケーション	15	0	コミュニケーションについて子どもの現状を学び、子どもを理解する。		
合計		50	0			
		50				

■ことばと指導法

【ことば・指導法】

タイトル	項目	時間		目標と内容	留意点	教材・器材
		学科	実技			
二つのことば	ことば(文字言語) ことば(音声言語)	6	2	文字言語と音声言語の特性に気付き、それらを効果的に活用しながら伝えることの重要性について理解する。	「ことば」を扱う講義であることを意識し、伝達者の実例を演じる。	スライド 文字を書いた紙
ことばと「伝える」ということ	ことばと伝達	4	0	ことばを使用する場合と使用しない場合の効果の関係性に気付き、それを応用して伝える技術の大切さを理解する。	文字言語を活用した伝達方法の実例として、音声言語を使用せず、スライドのみで展開する。	スライド
ことばのキャッチボール	受け手に適応した情報発信とコミュニケーション	6	2	受け手に応じた情報発信方法の選択の重要性に気付き、双方向のコミュニケーションの大切さを理解する。	受講者とのキャッチボールを実演する中で体験的理解を図る。	スライド 柔らかいボール もしくはぬいぐるみ
合計		16	4			
		20				

■子どもとライフセービングスポーツ・競技

タイトル	項目	時間		目標と内容	留意点	教材・器材
		学科	実技			
ライフセービングとスポーツ	ライフセービングはスポーツか?	5	0	ライフセービング競技の歴史を知り「ライフセービングとは何か?ライフセービング競技とは何か?」について考える。ジュニア・ライフセービング競技会の目的や全日本選手権の参加条件を確認する。		スライド
子どもにとってのライフセービングスポーツ	ライフセービングスポーツによって得られること	5	0	ライフセービングスポーツによって得られることについて考える。岩井臨海学園のアンケート結果を参考に、子ども達がどんなことを楽しみにしているか、または苦手と捉えているかについて考える。		スライド
ジュニア指導者としてのライフセービングスポーツ	指導者としての留意点	5		指導者としてライフセービングスポーツを実施する際の留意点や競技会の審判員としての心得えについて考える。		スライド
合計		0	0			
		15				

2) ジュニア教室・現地視察の実施

● ジュニア教室・現地視察の実施

➤ ジュニア教室をジュニア教育委員が現地視察し、指導指針の普及と検証を実施

①8月6日に片瀬西浜海水浴場(神奈川県)で西浜サーフライセービングクラブが実施したジュニア教室を視察
ジュニア・ライフセービング教室視察シート

実施クラブ	西浜サーフライセービングクラブ					
日時	22年 8月 6日(金)			9:00~12:00		
場所	神奈川県		都・道・府・県		片瀬西浜 海水浴場・海岸・ビーチ・プール・()	
対象	幼児	小学校1・2・3年	小学校4・5・6年生	中学生	保護者	合計
参加者数(人)			20			20
担当者	入谷拓哉・倉橋沙織					
JLAのねらい	水辺活動における楽しさの中から、自然や人との関わりあいを学び、相互理解から命の大切さを実感することによって、たくましく豊かな人間形成を目指す。					
クラブのねらい	人を助けることよりも、自分が溺れないようにすることを学ぶ。その為に必要な知識や体力を身につけることにより、安全について意識させ、さらに、自然や人間に対する愛情や思いやり、命の大切さを学ぶ。					
使用機材 教具・教材	ニッパーボード5本・レスキューチューブ2本					
	楽しさ		人との関わりあい		命の大切さ	
活動	特記事項		活動		特記事項	
【オリエンテーション】 テキスト・リーフレット配布						
自己紹介。海の安全について。準備運動。「常に笑顔にて。拍手でお互いをねぎらおう！」						
ランニングにて遅れた人をみんなで応援するように様に促す。「最後まであきらめないこと！」						
ライフセーバー・タワー・詰所などの位置を確認させる。						
			【バディシステム】 海には誰かと一緒に入る。お互いの安全確認をする。約束事の確認。 元気良く声を出すこと。話が聞こえづらいからしっかりと聞くこと。 ビーチクリーンの実施。 入水前に海の知識を伝える。(干満・波・プールとの違いなど)			
			【ウェーディング・ドルフィンスルー】 砂・水の感触を味わう。セルフレスキュー。サーフスキル。 指導者がレスキューチューブを持参し入水する。水慣れを膝の深さ・胸の深さ・浮き身と段階を経て行い、インアウトを実施する。インアウトも腰の深さ・距離を伸ばす・足の着かな深さへと段階を経て実施。最終的に一連の動作としてウェーディング・ドルフィンスルーができるようにしていた。指導の工夫として、ウェーディングは①教えずにやらせてみる②砂浜でデモ③海にてデモを行っていた。ドルフィンスルーは①砂浜でデモ②海にてデモを行い実践に入った。子ども達には難しい様であった。			
					【フロート・ヘッドアップスイム・ボディサーフィン】 浮くことの大切さ。顔上げの泳法。 背の高い順にて1人ずつ大きく泳ぐ。 沖の指導者を目標に周回し、砂浜にて休憩。数回実施する。 ボディサーフィンのデモから実践へ。 「身体を真直ぐに。」	
	【ニッパーボード】 「協力して2人で運ぶ」「器材を大切に」 「順番を守りのる」「波乗りを楽しむ」 以上のことを伝え指導していた。 流されてしまうので、スタートする位置を考えさせていた。 終了後、水道水にて器材を洗う指導。				【チューブレスキュー体験】 ニッパーボードと交互に実施。 体験を通して引っ張って泳ぐ大変さの感覚を養い、だから溺れないようにしようとする動機付けにつなげる。	
【ライフセービングリレー】 ニッパーボードによるチーム対抗リレーを楽しむ。 「頑張れ！」「ダッシュ！」などの応援や声援が盛んに聞こえてきた。全員で拍手にて称え合っていた。						
【まとめの時間】 テキストを使用しての講義 「海の11か条」「自分の身は自分で守る」についての話。「ビーチクリーン」で事故を未然に防ぐこともできる。 「溺れている人がいた場合は、みんなは助けないように。大人を呼ぶこと！」						
その他 気付き等	スイミングスクールに通う子ども達が、先生方の引率にて参加していた。(4つのスクールより参加) 日頃はそれぞれのスクールにて練習している子ども達ではあるが、自然での開放感や親身なライフセービング指導から、打ち解けあい仲良くなっていった。プールと海の違いも大いに刺激になったことであろう。引率の先生方が積極的に海に入り、ジュニア教室をサポートし盛り上げていたことが印象的であった。					
視察担当	丸田重夫					

②10月3日に江口浜海浜公園(鹿児島県)でかごしま磯ライフセービングクラブが実施したジュニア教室を現地視察

ジュニア・ライフセービング教室視察シート

実施クラブ	かごしま磯ライフセービングクラブ					
日時	2010年 10月 3日(日)			13:00 ~ 15:00		
場所	鹿児島	都・道・府(県)	江口浜海浜公園	海水浴場)海岸・ビーチ・プール・()		
対象	幼児	小学校1・2・3年	小学校4・5・6年生	中学生	保護者	合計
参加者数(人)	0	0	2	2	5	9
担当者	山下丞, 他6名					
JLAのねらい	水辺活動における楽しさの中から, 自然や人との関わりあいを学び, 相互理解から命の大切さを実感することによって, たくましく豊かな人間形成を目指す。					
クラブのねらい	自然の海で遊ぶことの楽しさだけでなく, 難しさも体験してもらいたい。					
使用機材 教具・教材	テキストブック, PFD, レスキューチューブ, ニッパーボード, パトロールキャップ					
	楽しさ		人との関わりあい		命の大切さ	
活動	特記事項	活動	特記事項	活動	特記事項	
オリエンテーション 座学	海とプールの違いとセルフレスキューについてパネルを用いて説明。	オリエンテーション 座学	ライフセーバーの存在意義について解説する。	オリエンテーション 座学	海とプールの違いとセルフレスキューについてパネルを用いて説明。	
		準備運動	参加者, 指導者, 保護者が輪になり行う。海と関わることへの心と体の準備。			
ビーチフラッグス	全力で仲間と競い合う楽しさを体感する。	ビーチフラッグス	仲間との競い合う中で関わり合う。	ビーチフラッグス	命を救う現場での集中力と判断力を体感する。	
		PFD	浮力体の装着練習における関わり合い。	PFD	浮力体装着手順の習得と浮いて泳ぐ体験。	
				レスキューデモンストレーション	チューブレスキューを見学する中で, セルフレスキューの大切さを知る。	
その他 気付き等	<p>薩摩半島西側海岸吹上浜の最北部に位置する江口浜海浜公園。地域開発の中で整備され, 芝生広場, ボードウォーク, コンクリートステップ, 遠浅の海といったロケーションに恵まれている。更衣室・シャワー・トイレなども完備しており, NPO江口浜サービスが管理している。</p> <p>同NPOが毎年夏主催するイベント「はだしのコンサート」の一環として, 今年初めてかごしま磯ライフセービングがジュニアライフセービング教室を実施した。ビーチクリーンで拾ったごみが入場料の代替となる, ライフセービングスピリットに通ずるコンサートとの同時開催は意義深い。</p> <p>天候不順等の要因により, 当初の予定を下回る4名の参加者(小学4年生1名, 小学6年生1名, 中学1年生2名, 保護者等5名)を迎えての少人数での教室であった。小学生(男児2名)は地元の兄弟, 中学生2名(男女1名ずつ)は大分県から参加した双子であり, どちらも父母ととも参加であり, 全ての活動において家族ぐるみで活動していた。特に双子の家族は, 4年前の初回から「はだしのコンサート」ビーチクリーンにはるばる大分県から参加しているライフセービングファミリーであることが印象的であった。</p> <p>山下氏の幅広く奥深い知識と判断力, 組織力等により, 安全に配慮し, 一つ一つの活動プログラムの意義と活用について, 懇切丁寧に説明が進められた。特筆すべきは, 子どもたちにはセルフレスキューの視点から, 保護者に対しては保護監督の視点からといった双方向からの意義付けを常に意識されていたことである。また, 人数が少ないこともあるが, 個々の能力に配慮した活動が展開されていたこともライフセービングスピリットに通ずる。終末で, 箸の柄をスタンドマイクに見立て, 感想を発表する場面の設定は, 参加者が自身の自己評価を, 見守った保護者の前で表現することの意義深さを実感させた。</p> <p>ジュニア・ライフセービング教室開催に当たっては, 参加者数や器材の充実度に注目されることが多いが, 果たしてそれがどこまでの重要性を持っているのか, 改めて考えさせられた視察である。一人ひとりの命あるいは存在に対して, 丁寧に対峙しコミュニケーションを図りながらライフセービングを伝えることが本来のプログラム意義だと考えさせられた。</p>					
視察担当	藤井正弘					

3) ジュニア指導者研修会の実施

- ジュニア指導者研修会の実施
 - 各クラブのジュニア担当者を主な対象として、「指導指針」の普及ならびにジュニア指導者養成に向けた「ジュニア指導者研修会」を開催しジュニア指導者養成に向けたプログラムの共同開発や情報交換を実施
 - 開催日:
 - ◇ 06/12(土) 14:00～18:00 参加人数;10名 関西会場(神戸YMCA 学院専門学校)
 - ◇ 06/13(日) 14:00～18:00 参加人数;23名 関東会場(成城学園高等学校会議室)
 - ◇ 01/30(日) 09:30～16:30 中止
 - ◇ 02/13(日) 09:30～16:30 参加人数;60名 関東会場(東京メディカルスポーツ専門学校)
 - 内容:
 - ◇ 指導指針の確認
 - ◇ ジュニアプログラム実践例の紹介
 - ◇ 子どものコンディショニングと～発育発達の理解と実践～
 - ◇ ワークショップ ほか

■6/20、6/21のスケジュールおよび内容

【タイムテーブル】

13:00 (30分)	受付開始
13:30 (90分)	①JLA ジュニアプログラム指導指針の確認
15:10 (30分)	②ジュニアプログラム助成制度についての申請および報告について
15:40 (90分)	③岩井臨海学園プログラム (岩井臨海学園参加者および希望者のみ)
17:10 (20分)	事務連絡
17:30	解散



■2/13 のスケジュールおよび内容

2月13日(日)東日本 東京メディカルスポーツ専門学校		
項目(配当時間)	時刻	参加者
受付 (30)	9:00	現地集合・受付
開会式 (15)	9:30	開会式・諸連絡
映像	9:45	ジュニア教育 映像放映
講義① (80) 休憩含む	10:00	①ジュニア・ライフセービング概論
	休憩 5分	②ジュニア教育のマネジメント
	15分	アイスブレイク 実践を通して学ぶ。お互いの緊張をほぐす。
		③子どもと競技・スポーツ
		④ことば・指導法
休憩 (10)	11:20	休憩時間を活用して交流を図る。
実践報告 (30)	11:30	大洗サーフライフセービングクラブ ジュニア・ライフセービング教育実践報告 現状と課題 質疑応答
昼食・休憩 (60)	12:00	昼食・休憩時間を活用して交流を図る。ジュニア映像放映。
講義② (100) 実技含む	13:00	「子どものコンディショニング ～発育発達の理解から心身を育てる～」 コンディショニング科学委員会 小粥委員長
休憩 (10)	14:40	休憩時間を活用して交流を図る。
演習 (70)	14:50	アイスブレイク 実践を通して学ぶ。お互いの緊張をほぐす。 ワークショップ
ふりかえり (15)	16:00	ふりかえりシート+アンケート用紙記入
閉会式 (15)	16:15	閉会式・諸連絡
解散	16:30	解散・懇親会準備
懇親会 (60)	16:45	開会挨拶
		乾杯
		懇談を通して親しむ=懇親 ジュニア教育関連映像
	17:45	閉会挨拶
解散	18:15	片付け・解散



②3月20日に大分市営温水プール(大分県)で大分ライフセービングクラブが実施したジュニア教室を視察

ジュニア・ライフセービング教室視察シート

実施クラブ	大分ライフセービングクラブ					
日時	2011年 3月 20日(日)			13:30 ~ 15:30		
場所	大分 都・道・府(県) 大分市営温水プール 海水浴場・海岸・ビーチ(プール)・()					
対象	幼児	小学校1・2・3年	小学校4・5・6年生	中学生	保護者	合計
参加者数(人)	19				5	24
担当者	尾田智史, 岸川敬子他2名(大分LSC), 大分着衣泳会2名					
JLAのねらい	水辺活動における楽しさの中から, 自然や人との関わりあいを学び, 相互理解から命の大切さを実感することによって, たくましく豊かな人間形成を目指す。					
クラブのねらい						
使用機材 教具・教材	パネル, レスキューチューブ, ニッパーボード, パトロールキャップ, 浮力体になる生活用品					
	楽しさ		人との関わりあい		命の大切さ	
活動	特記事項	活動	特記事項	活動	特記事項	
あいさつ	ハワイの言語に親しむことによる楽しさを体感する。	仲間へのあいさつ	ヒューマンチェーンでのスキンシップを図る。	プールのあいさつ	生命を育む自然に対する畏敬と感謝の気持ちを持たせる。	
バディ	ゲーム要素を取り入れることにより楽しく活動する。	バディ	年齢層を考慮したペアをつくる。	バディ	番号確認を繰り返すことにより安全性重視の姿勢を伝える。	
水慣れ	水深と身長を配慮する安全性確保と楽しさを追求する。	水慣れ	ヒューマンチェーンでのスキンシップを図る。	水慣れ	ヒューマンチェーンでお互いを守る意識を高める。	
セルフレスキュー	ランドセル, PFD, ペットボトル, ロープ, フローティングバッグ, ボールなど身近な物を浮力体にした浮き身を体感させ, 万が一の時には活用できるようにする。	セルフレスキュー	その場にいる仲間とコミュニケーションを図ることが, 相手意識を育て常に仲間を思いやる気持ちにつながるようにする。	セルフレスキュー	背浮きを体験し, 万が一の際に救助してもらえる自分になるなど, 自分の身は自分で守ることが最も大切であるという意識を持たせ, セルフディフェンスの方法を体感する。	
チューブレスキュー体験	競争・達成型ゲームとして実施することにより意欲の向上を図る。	チューブレスキュー体験	声を掛け合うことによる言語コミュニケーションと, 行為による非言語コミュニケーションの両立を図る。	チューブレスキュー体験	命の重さを体感することによる「助けてもらわない自分になる」セルフレスキュー意識を持たせる。	
ニッパーボード ビート板	競争・達成型ゲームとして実施することにより意欲の向上を図る。	ニッパーボード ビート板	声を掛け合うことによる言語コミュニケーションと行為による非言語コミュニケーションを活用し, お互いを支え合う中で生まれるサポートスピリット育てる。	ニッパーボード ビート板	自分の身を守るセルフレスキューとして, 浮力体としてのニッパーボードやビート板を活用するという意識を育てる。	
その他 気付き等	大分ライフセービングクラブが監視業務を行っている大分市営温水プールにて, 初めてのジュニア・ライフセービング教室が開催された。本プールでのスイミングクラブに所属する小中学生が主たる参加者で泳力のある子どもたちであったが, 泳ぐこととは異なったセルフディフェンスの考えに基づくライフセービング教室に対する子どもたちの関心と意欲は高いものであった。大分着衣泳会による浮力体の活用方法, 浮き身のとり方など丁寧な指導がなされた。ライフセービング活動及びその一環としてのジュニア・ライフセービングプログラムを見学させていただき, 大いなる学びを獲得することができた。					
視察担当	藤井正弘					

平成 22 年度ジュニア研修会 宮崎会場について

平成 23 年 1 月 30 日に実施予定であった、ジュニア・ライフセービング教育指導者研修会（宮崎会場）は、霧島連山新燃岳の噴火・噴煙被害により実施を延期としました。また、延期の代替日程として計画をしておりまして、平成 23 年 3 月 20 日の大分会場については、3 月 11 日に発生しました東北地方太平洋沖地震の影響を鑑み実施を見合わせることになりました。これらの状況により、平成 22 年度の西日本会場については中止としましたことをここにご報告させていただきます。

以下、本件に関わる経緯や状況をまとめたものです。

■ジュニア研修会宮崎会場、延期判断に至る経緯

<1/28（金）>

15:00 頃連絡あり。（事務局佐藤→丸田ジュニア教育委員長）

案①研修会の中止 対応早く 参加者連絡 HP 連絡 航空機・ホテルキャンセルなど

案②会場の変更 熊本会場の検討も。

第①案にて検討する。

現地藤田氏（JLA 九州支部長）と事務局佐藤が情報共有と協議。「中止が妥当ではないか。」

「不安視される場所への集中は避けた方が良い。」という地元宮崎 LSC の助言。

事務局中山より「理事・委員会判断に任せる。」という旨の連絡を佐藤が受け、丸田委員長へ連絡。

松本理事（JLA 教育部担当）と丸田委員長が協議し教育部・委員会判断として、事務局佐藤へ連絡。

18:00 頃 中止を決定する。

多角的に判断し状況悪化が懸念される。噴煙の状況（第 2 回目の噴火）・

航空機（羽田－宮崎全便欠航）・鉄道（一部運休あり）・道路（一部通行止め区間あり）

<中止の報告と連絡>

参加予定者へ 佐藤氏・藤田氏

日本協会へ 松本理事

委員会へ 丸田

■ジュニア研修会大分会場、中止判断に至る経緯

宮崎会場が延期となり、代替案として大分会場を提案。藤田九州支部長、尾田代表（大分 LSC）と協議の上、3 月 20 日に開催を決定。

<3/11（金）>

東北地方太平洋沖地震の発生。

<3/15（火）>

下記理由により、中止の判断

○計画停電の状況から交通網の問題

○原発の現状と今後の行方

○余震の危険性

なお、3 月 20 日に大分 LSC 主催のジュニアライフセービングプログラムは実施するとのこと。数少ない貴重なプールプログラムのため、岡山県在住の藤井委員を派遣し、プログラムの視察、情報収集をお願いした（前ページに報告書添付）。

おわりに

昨年度の報告書奥付には、
日本財団活動指針『フィランソロピー実践のための七つの鍵』

- 1 あまねく平等にではなく、優先順位を持って、深く、且つ、きめ細かく
対応すること
- 2 前例にこだわることなく、新たな創造に取り組むこと
- 3 失敗を恐れずに速やかに行動すること
- 4 社会に対して常にオープンで透明であること
- 5 絶えず自らを評価し、自らを教育すること
- 6 新しい変化の兆しをいち早く見つけて、それへの対応をすること
- 7 世界中に良き人脈を開拓すること

を引用させていただきました。

貴財団からの助成は、目に見えるものに限らず、形而上のものがその背景にあり、それこそが大きな支えとなっているからです。

“七つの鍵”に学ぶ中で、『水辺活動における楽しさの中から、自然や人との関わりあいを学び、相互理解からいのちの大切さを実感することによって、たくましく豊かな人間形成を目指す』ために、今後も邁進していくとの決意を申し上げました。

1991年、日本ライフセービング協会が誕生し、10年を経て内閣府により特定非営利活動法人としての認証を受け、本年いよいよ20周年を迎えます。

“次世代へ伝えること”に存在意義を見出すのがジュニア・ライフセービング教育です。

この数年間で、Lifesaving(ライフセービング)活動に携わる児童・生徒及び青少年が急増しています。さらに、子どもたちの参加をきっかけとして、家族・地域等の社会に広がりを見せ始めており、教育団体としての日本ライフセービング協会の目的が実現の緒につきました。

日本財団からいただいている助成は、日本国内でライフセービングが継続的に裾野を広げていくための大きな源となっています。

すでに、ライフセービングは、「日本の文化としての発展」をスタートしています。

2011年3月
日本ライフセービング協会
ジュニア教育委員会一同